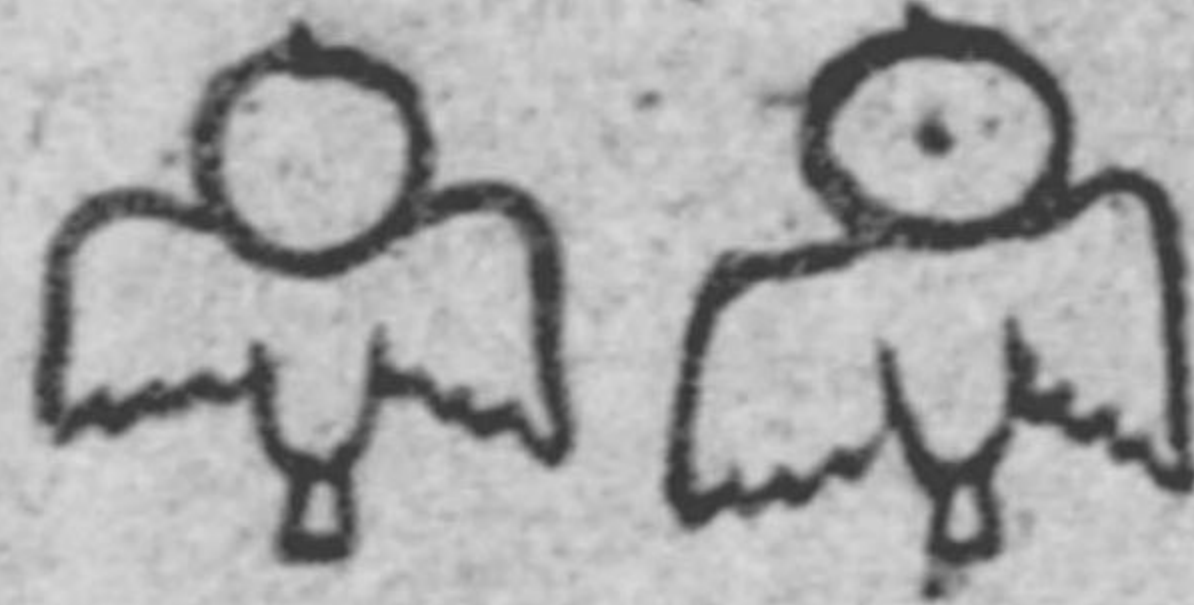


263.2

610



ヨ
ミ
カ
タ
一



文
部
省



教
師
用



0050374001

0050374-001

263.2-610

ヨミカタ

文部省・編

文部省

教師用 第1-2

昭和16

AHJ



夕
一

文
部
省



教
師
用

發行所寄贈本

「ヨミカタ」教師用目録

總説

一 國民科指導の精神……………七

(1) 國民科の意義……………七

(2) 國民科に於ける教科と科目との關係……………九

(3) 國民科の教科書とその指導方針……………一一

(4) 國民科と他教科及び儀式學校行事との關係……………一六

二 國民科國語指導の精神……………一九

(1) 國民科國語の意義……………一九

(2) 國語指導の四分節……………二二

分節の基礎……………二二

音聲言語指導と文字言語指導……………二三

讀み方……………二五

各説

綴り方……………二八

書き方……………三〇

話し方……………三一

(3) 國語愛護と國語の醇化……………三三

三 國民科國語教科書……………三九

(1) 編纂方針……………三九

(2) 第一期の國語教科書……………四一

ヨミカタ……………四二

コトバノオケイコ……………五一

教師用書……………五三

掛圖……………六四

一 ラジオ體操……………六七

二 校庭の遊戯……………六九

三 アカイアサヒ……………七二

四 ハトコイ……………七六

五 コマイヌサン……………七八

六 ヒノマルノハタ……………八二

七 ヘイタイサン……………八五

八 アヒル……………八九

九 ハシレハシレ……………九二

十 ココマデオイデ……………九四

十一 カミフウセン……………九七

十二 ウシヒバリ……………九九

十三 ユフヤケ……………一〇四

十四 オツキサマ……………一〇六

十五 オハヤウゴザイマス……………一〇九

十六 ホンダイサムサン……………一一三

十七 エラカキマシタ……………一一六

十八 サヤウナラタダイマ……………一一八

十九 ヒカウキ……………一二二

二十 オツカヒ……………一二五

二十一 デンワアンビオキヤクアソビ……………一二八

二十二 シリトリ……………一三三

二十三 カクレンボ……………一三五

二十四 キヲツケ……………一三八

二十五 アメガヤミマシタ……………一四一

二十六 イケニフネ……………一四四

二十七 ホタル……………一四七

二十八 ダナバタ……………一五〇

二十九 ハコニハ……………一五三

三十 ココハドコノホソミチダ……………一五六

三十一 オミヤノ石ダン……………一五九

三十二 アサガホ……………一六二

三十三	オハカノサウヂ	一六五
三十四	花ツミ	一六九
三十五	ユフダチ	一七四
三十六	ニジ	一七七
三十七	アリ	一八〇
三十八	川アソビ	一八四
三十九	メダカサン	一八七
四十	トビトカメ	一九〇
四十一	シタキリスズメ	一九四
四十二	オ月サマ	一九八
四十三	モモタラウ	二〇三
四十四	カタカナ圖表	二〇八

附 録

新出讀替文字一覽	二二一
運筆順序	二一九

鉛筆による書き方指導上の注意	二二〇
ヨミカタ一の發音	二二二

綴り方指導要項

綴り方指導要項	二四四
指導の發展段階	二四四
初等科第一學年	二四五
一指導要項	二四五
二指導要項例	二五〇
三參考文題	二五七

話し方指導要項

話し方指導要項	二六五
指導の發展段階	二六五
初等科第一・二學年	二六六

總 說

一 國民科指導の精神

(1) 國民科の意義

國民科の目的
國民學校は、皇國ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的鍊成ヲ爲スヲ以テその目的とする。國民科はこの目的を全うするため
に設けられた教科の一つであつて、特に國體の精華を明らかにし、國民
精神を涵養し、皇國の使命を自覺せしめる點に於いて重要な任務を有
する。

國體の精華

教育に關する勅語には

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深

厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美
ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存
ス
と仰せられてある。國體の精華を明らかにすることは、とりもなほさ
ず皇國の道を明らかにすることであり、道を體得實踐して億兆一心の
實を擧げることである。

國民精神

國民精神は皇國の道に基づいて發揮せられる。しかもそれは、無窮
に生々發展する皇國の相を體現してあらゆるものを包攝する博大な
精神である。義勇奉公を中核として活動することは勿論であるが、ま
た優にやさしいもの、あはれを知る心もそれであり、外來文化を攝取
して、これを自家藥籠中のものとなし、獨自の文化を創造展開して行く
精神もそれである。

皇國の使命

皇國の使命は肇國の大精神に發源する使命であり、皇國の道を體と
し、國民精神の發揮によつて遂行せらるべき使命である。随つてこの
使命は、肇國の事實に基づいて本來道義的であり、皇國の生々發展に即
して歴史的であり、また世界的であるといふことができる。さうした
皇國の使命に就いての自覺を促し、將來の活動に資せしめんとすると
ころに、國民科指導の窮極の目的はある。

(2) 國民科に於ける教科と科目との關係

皇國の道と國民科

皇國の道とは、教育に關する勅語に示し給へる「斯ノ道」に外ならない
のであるが、「斯ノ道」を學ぶとすれば、先づ道の教に即して國民道徳を體
得し實踐することが、國民科の任務の一重點となる。しかも「斯ノ道」は
皇祖皇宗の御遺訓であり、皇祖皇宗の宏遠なる肇國、深厚なる樹徳をは
じめ奉り國史的事實に基づいての道であるから、かうした歴史的事實

に即して皇國發展の相を明らかにし、皇國の大生命を感得せしめることによつて、皇國の道を學ばしめることが大切であり、ここに國民科教科内容の第二の重點がある。しかも歴史と分つべからざるものは我が國土であり、我が國土國勢を明らかにすることによつて皇國の道を學ぶことが大切である。ここに第三の重點がある。この三重點を通じて學ぶことによつて、始めて古今に通じて謬らず中外に施して悖らざる「斯ノ道」が體得されるわけであるが、更になほ「斯ノ道」及び「斯ノ道」に基づいて發現する國民性、國民精神、國民文化等は、我が國の言語によつて表現され、理解される場合が極めて多いのであるから、國語の習得も亦國民科の重點となる。

國民科の四科目

即ち國民科といふ教科は、皇國の道を明らかにし、これを體得實踐する立場から自ら右四つの重點を含むのであつて、これがとりもなほさず國民科が修身、國語、國史、地理といふ科目に分化する所以となるので

ある。随つて國民科が四科目に分れることは、在來の小學校に於ける修身、國語、國史、地理が、簡單に國民科の中に束ねられたことを意味するものではなく、寧ろ逆に國民科の目的を遂行するための重點として四科目が分化するのであり、あくまでも原理的に一貫して國民的自覺を喚起し、信念に培ふ教科である。

(3) 國民科の教科書とその指導方針

教科書の分化と指導方針

國民科に屬する教科書は、その科目に應じてそれぞれ分身するものであるが、その目的に於いて精神に於いて一致するのは當然であつて、指導に際しては、先づこの點に對する十分な考慮が肝要である。

しかも教科書にはそれぞれの特色があり、教材は多種多様であるが、しかしどの教科書どの教材を取扱ふにしても、常に大局から見て次の如き指導方針を見失ふことのないやうにしなければならぬ。

一、皇國に生まれたる喜びを感じしめ、敬神奉公の眞義を體得せしむること。

一、我が國の歴史・國土が優秀なる國民性を育成したる所以を知らしむるとともに、我が國文化の特質を明らかにしてその創造發展に力むるの精神を養ふこと。

一、他教科と相俟つて、政治・經濟・國防・海洋等に關する事項の教授に留意すること。

これらの條項はいづれも、我が肇國の大精神を堅持し、皇國の使命を自覺せしめんとするところから生まれ來るものである。天壤無窮の皇位を中心とし奉り、一君萬民、君民一體の國家活動に對する信念、正しく明かるい國民生活の展開に對する信念、無限の努力に基づく卓越した國民文化の創造に對する信念を周到なる注意のもとに獲得せしめなければならぬ。

教材の排列

但し、かくの如き指導目的は一足跳びに達成されるものではない。

随つて國民學校に於いては、教材を兒童心身の發達に即せしめ、その生活の實際並びに生活環境と照應せしめながら、段階を追うて進むものである。即ち教科書は教材を精選しつつ、左の四期に亘つて發生的に組織する。

第一期 初等科第一、二學年

第二期 初等科第三學年

第三期 初等科第四、五、六學年

第四期 高等科第一、二學年

右は國民學校の教科書全般に亘る編纂方針であるが、國民科に就いていへば、

第一期に於いては、特に兒童生活に於ける讀と國語の初歩的練習とを主とし、日常行爲にあらはれて來る事象に就いて見方、考へ方、並びに實踐を指導し、且想像力を豊かならしめるやうにつとめる。「ヨイコド

モ「ヨミカタ」はこの目的を達成するために編纂された教科書であつて、それらは修身・國語の教科書であるとともに、國史・地理の萌芽を含むものである。しかもこの期の兒童の心情と理解とに即し、全國共通の兒童生活に取材するとともに、生活曆によつて排列されてゐることも見落すべきではない。

第二期に於いては、生活體驗に對する正しい理解力と發表力とを伸張せしめ、次第に道徳的理想構成の方向に向かはしめようとするものである。この時期は兒童前期から兒童後期に移る過渡期として、特に考慮した教科書が編纂され、隨つてそれに應じた取扱が考慮さるべきである。

第三期に於いては、兒童を自覺的ならしめることに重點を置いてゐる。隨つて實踐の能力を助長するとともに、道徳的判斷が十分に行はれるやうに輔導しなければならぬ。この時期に至つて、國民科は修身・國語のほか、郷土愛の念を涵養し、郷土の觀察をなさしめるのであ

るが、同時にまた國史・地理の二科目を分化せしめ、それに應じた教科書を提出する。

第四期に於いては、第三期に至るまでの基礎的な鍊成の上に、東亞の情勢並びに世界の動向を知らしめて、益々國體の精華を明らかにし、大國民たるの資質に培ふものである。

第一期の教科書

「ヨイコドモ」と「ヨミカタ」は第一期の兒童に對する國民科の教科書として作られたものであつて、國民的自覺信念に培ふといふ點では一體であり、教材内容は相互に連絡し、補足し合つてゐる。いはば「ヨイコドモ」は國民生活の正しい筋道を明らかならしめる表側となり、「ヨミカタ」は國民的な感情情緒を豊かにして心の奥行を作る裏側になつてゐる。しかも「ヨイコドモ」は國民的自覺を喚起しながら、實踐行爲に躋けることを求めるものであり、「ヨミカタ」は言語文章を訓練することばの實踐に導き、ことばの國民的思考感動を通じて、國民精神を養ふものであつ

て、そこに自ら取扱の相違があるのである。

(4) 國民科と他教科及び儀式學校行事との の關聯

理教科との關聯

國民科は皇國の道を明らかにし、國民的自覺信念に培ひ、實踐せしめることを目的とする。随つて皇國の新たな伸長を意圖する限り、國民科は同時に科學の重要性の理解と文化創造の任務を自覺せしめるものでなければならぬ。その點全く理教科に於ける合理創造の精神の涵養と軌を一にする。また理數科的な考察處理を重んずる生活態度の養成と、自然の觀察への契機を與へる點で、極めて密接な關聯を有するものである。

體鍊科との關聯

體鍊科とは保健衛生に關する指導によつてかたく結びついてゐるが、心身一體の境地をめざす國民學校教育としては、同時に、獻身奉公規律協同服從公明正大の精神を涵養するとか、體鍊に關する禮法の修練を基礎づけるとか、武道精神を鼓吹するとか、體鍊科に於ける修練と不可分の關聯にある。

藝能科との關聯

國民科は國民精神の涵養を意圖するものであるが、そのなかには當然國民的情操を醇化し、高雅な趣味を涵養することを含んでゐる。随つて藝能科ともまた不可分である。特に表現鑑賞の能力に培ひ、家庭生活の理會、婦徳の涵養を期すること等、藝能科教育のめざすところと離るべからざるものがある。

實業科との關聯

實業科は一面に於いて、國民科の精神を實生活に具現することを意圖する教科である。特に職分を通じて公に奉ずるの精神を養ひ、産業の國家的使命を自覺せしめ、海外發展の素地に培ふ等、國民科に於ける

指導はそのまま實業科に於いて擴充せられるわけである。

儀式學校行事との關係

儀式・行事等に對してその本義並びに由來を明らかにし、禮法を修練し、生活體驗を發表し整理する等、國民科の分擔するところは極めて重大である。

二 國民科國語指導の精神

(1) 國民科國語の意義

國民學校令施行規則第四條に

國民科國語ハ日常ノ國語ヲ習得セシメ其ノ理會力ト發表力トヲ養ヒ國民的思考感動ヲ通ジテ國民精神ヲ涵養スルモノトス

とある。國民學校に於ける國語指導の範圍方法・目的の三者がこの中に要約されてある。

「日常ノ國語」とは、日常生活に使用する國語の意義で、特殊・専門、乃至高尚な國語に對し、ここに國民學校教育としての限度が示してある。「日常ノ國語」は換言すれば普通の國語である。もちろん生活言語としての生きた國語を基礎とするが、といつて方言・訛語や蕪雜野卑な言語を含むもの

ではない。それらは教育的立場から當然矯正醇化さるべきものであり、どこまでも醇正な國語を對象とすべきものである。更に「日常ノ」といつたからとて、單に我々の日常の話しことば及びそれを基礎とする口語文に限るわけではなく、普通の文語や或程度の古典語をさへ含んでゐる。これを要するに「日常ノ國語」とは、普通の國民生活に必須であり、基本的規準的な國語を意味するものである。

日常生活に使用する國語には、いはゆる話しことばとしての音聲言語と、文字に書きあらはす文字言語とがあり、國民學校に於ける國語指導は、この兩者に亘つての理會力、發表力を養はなければならぬ。即ちその理會力は讀むこと、聽くことによる理會力であり、その發表力は、話すこと、書くこと、綴ることによる發表力であつて、ここに國語指導が「讀み方」「綴り方」「書き方」「話し方」等に分節する基礎がある。

國語を指導する者は、豫め國語の本質を見定めておくことが大切である。

言語を單に思想傳達の道具とする考へ方は、極めて通俗的な言語觀であるが、これがためにしばしば教育上の過誤を來たすことがある。なるほど言語を結果からのみ見れば、一種の符徴であり、道具である。しかし言語によつて發表される思想は、元來言語を通して考へられ、感じられた所産である。換言すれば、我々は言語を通して思考し、感動して思想を構成するのである。思想と言語とが紙の表裏の如く一體不可分であるといふ理由はここに存する。これを國語に就いていへば、我々日本人は、國語を通して考へ、感じ、思想を構成する。我々の思考なり、感動なり、思想なりは、どこまでも國民共有——祖先傳來の國語と離るべからざるものである。さうしてここに國語指導の大切な鍵が秘められてゐるのである。即ち國語指導の第一義諦は、國語そのものと分つべからざる國民的思考感動を通じて國民精神を涵養することにある。換言すれば、國語は國初以來國民がなし來つた思考感動の結晶體であり、國語指導は、この思考感動と一體たらしめることによつて國民精神を啓培することにあるの

である。

言語を思想交換の具とのみ見る者は、ややもすれば言語そのものを形式としてこれを軽視し、言語發表の題目たる材料を内容と考へてこれを尊重する結果、言語指導をして恰も實物そのものの指導の如き觀を呈せしめる。もとより實物そのものの指導は教育上大切なことではあるが、少くとも國語指導に於いては言語が主であり、實物は客であつて、この主客を顛倒するに至つては、既に國語指導は存在しないといはなければならぬ。

(2) 國語指導の四分節

分節の基礎

國語に音聲言語と文字言語の両面がある以上、國語指導はこの兩者にかけての理會力、發表力を養はなければならぬ。即ち音聲言語の指導

には「話し方」「聽き方」が、文字言語の指導には「讀み方」「書き方」「綴り方」が分節し得るゆゑである。但し實際問題として考へれば、「聽き方」は「話し方」の一面として相即するのであるから、「聽き方」は「話し方」に包含するものとして、「讀み方」「綴り方」「書き方」「話し方」の四つが國民科國語に於いて取立てられたのである。

音聲言語指導と文字言語指導

在來「話し方」は、國語指導の一分節として明らかに認識されてゐなかつた。ために我が國語指導は、ややもすると文字言語に限られがちであり、ここに國語指導の弱點があつたと考へられる。國民科國語に於いて新たに「話し方」が拾ひ上げられ、表面におし出されたのは、大に注意すべきことである。言語の發生的見地からすれば、いふまでもなく音聲言語が文字言語に先んじて出現し、音聲言語の地盤の上に文字言語が發達したのである。隨つて文字言語としての國語指導を徹底するためにも、その地

盤たる音聲言語としての國語が正しく豊かに培はれることが大切であつて、そこに「話し方」の重要性がある。

しかし、それかといつて、國語指導の窮極の目標が音聲言語にあるかの如く考へるのは、早計であり誤りである。殊に國內の兒童を相手とする國語指導は、國語を外國語として教へる日本語教授と、その出發點に於いて趣を異にする。學齡兒童は既に家庭なり社會なりから音聲言語を學び、數千の語彙をもつてをり、彼等の生活に必要な程度に於いてそれを自在に驅使してゐる。國內に於ける音聲言語の指導は、兒童のかうした生活言語を基礎として、次第にこれを醇化し、發音語法を適確ならしめ、進んでは音聲言語そのものを高めて行くことにある。さうして、かうした役目は、寧ろ文字言語の習得によつて果たされることが決して少くないのである。今日國內に於いて用ひられる話しことばが、文字言語によつて統一され、醇化され、高度化されて行くのと同じやうに、兒童の言語もまた文字言語の習得によつて統一醇化され、高度化されて行くのである。た

だ文字言語のみによる教育は、ややもすれば音聲言語の重要性を閑却し、その修練を等閑に附する結果、文字言語と音聲言語との分裂を來たし、文字言語は陶冶されながら、音聲言語は野卑な方言訛語のままに放置される。その結果一般社會の音聲言語をして健全な發達をなさしめないで終ることになる。故に國語指導に於ける音聲言語・文字言語の指導は、互に相倚り相俟つてその効果を全うすべきものであることを忘れてはならない。

讀み方

「讀み方」は在來國語指導の主體であつたが、今後といへどもその重要性は決して變らないはずである。いはば「讀み方」は、國語指導の中核であり、その縮圖である。即ち「讀み方」は、單に讀むことばかりでなく、書くこと、話すことをそれ自體に包含してをり、隨つて「書き方」「話し方」及び「綴り方」と密接不可分の關係をもつからである。

言語文章は思考感動と不可分であり、それ自體生命的な存在である。正しく讀むことは、結局文字を通じてこの思考感動と一體になることであるが、それが操作としては、先づ正しい發音抑揚による音感から出發して、言語の意味・語感に没入しなくてはならない。なほ讀むといふことは、文字の正しい發聲を出發點としていふのであるが、進んだ階梯に於いては發聲階段を通過した默讀をも含むことはいふまでもない。

「讀み方」は、要するに正しく讀む力を養ふことを目標とするものではあるが、それがためには單に讀むことばかりでなく、種々の操作が必要である。殊に年少の兒童に對しては、教材に即して種々の言語活動をさせることが、一面には意味感情に徹して讀みを深からしめるゆゑんであるとともに、一面には音聲言語の基礎練習をなさしめることになるのであるから、或は挿畫掛圖や文章に就いて話合をさせるとか、或は文章を暗誦させ、又これを劇的に演出させるとかが、「讀み方」に於ける大切な操作となるわけである。かくの如くして、「讀み方」と「話し方」とは指導の實際に於いて

相即一致することが考へられる。

更に書くこともまた「讀み方」の一操作であると考へられる。即ち文字の劃や筆順を正しく指導し、正確に書寫せしめることに始まつて、文字の記憶を確實にし、進んで教材を適當に書取らしめることがそれであつて、ここに實際指導に於ける「讀み方」と「書き方」の相即がある。この場合注意すべきことは、書くことを徒に器械的ならしめ、言語の取扱を形骸化せしめないことである。書くことは一面に讀む力を深めて行くための作業であり、言語文章の意義とか構造とかは、讀むこと以上に書くことによつて體得されることが多い。随つて書寫や書取は單なる文字練習として行ふべきでなく、適當な範圍内で教材の文章を書かせながら理會せしめることが大切である。特に韻文などは全文を書かせることによつて思考感動に徹せしめることが取扱として望ましいことである。

以上の如く、「讀み方」は、讀むこと、書くこと、話すことを包攝することによつて國語の正しい理會力を養成することを目標とするものであるが、こ

の理會力はやがて言語の發表力として、話し方「綴り方」に發揮せしむべきものである。

綴り方

「綴り方」指導は、「読み方」指導に於いて養はれた文字言語の理會力を基礎として、文字言語の發表力を鍊成する國語指導の一分節であつて、「読み方」と密接な關係をもつものであることはいふまでもないが、しかもまた「綴り方」は、「話し方」と分離すべからざる間柄にある。即ち「綴り方」は、話すことの文字言語化であり、随つて「話し方」の延長發展と見なすことができる。特に低學年に於ける「綴り方」は、「話し方」から出發することが大切であり、ここに指導の實際に於ける「話し方」「綴り方」の相即があることを忘れてはならない。

「綴り方」は、話すことの文字言語化であるが故に、兒童の生活言語は「綴り方」を通して醇化せらるべきであつて、ここでもまた當然方言訛語を矯

正し、醇正な國語による平易明白な文章を作らしむべきである。

「読み方」の指導は、もちろん兒童生活を出發點とはするが、年級の進むに随つて漸く高次の國民生活、國民文化を主體とする教材に移行する。これに比べると、「綴り方」は大體に於いて兒童生活に終始する國語指導である。いはゆる國語に於ける生活指導は、「読み方」よりも寧ろ「綴り方」に於いていひ得ることである。そこで「綴り方」に於いては、兒童生活そのものを適正に指導することが大切になつて來る。換言すればその生活に即して物の見方、考へ方を適正に指導することが大切なのである。この方面の指導が在來教育的に考慮されなかつたために、「綴り方」指導は或程度の發達を遂げながらも、不幸にして不健全な思想を醸成しないでもなかつた。殊に文學の自然主義的な傾向から、物の眞を描かしめようとして道を逸脱し、生活の物的方面に捕はれて理想を失ひ、甚だしきは現實生活の缺陷にさへ兒童の眼を向けさせようとした。「眞」を描く前に先づ如何なるものを書くべきかを指導する必要がある。「道」に照らして心にうつり行

く情意を表はさしめることが大切であらう。換言すれば教育の立場から要求される倫理性は、綴り方に於いても例外なく要求されるのである。しかも綴り方は、國語による生活の表現であるが故に、そこには絶え間なき創造の営みがあることを忘れてはならない。國民學校の教育は兒童の創造力を育成することを念とするものであり、この觀點からすれば、國民科に於いてこれを擔當するものは國語を措いて外になく、しかもその最も積極的なのが綴り方である。即ち兒童の見方、考へ方の指導は、常に新しいものを創造して行くことに努力せしめ、創造力に培ふことが大切なのである。

書き方

「読み方」「綴り方」に於ける文字書寫の基礎として「書き方」がある。國民學校の制度では在來の「書き方」の一部が「習字」として藝能科におかれたのであるから、國語の「書き方」は殆ど「読み方」に包攝されることになる。即ち書

き方は初等科一二年に於ける文字練習の基礎をなすもので、「読み方」の書取と相俟つて明確端正に書くことを指導するものである。

話し方

音聲言語指導としての「話し方」の意義と、その重要性に就いては、既に述べたところであるが、しかも「話し方」指導の實際に就いては將來の攻究に俟つべきものが頗る多い。

音聲言語は、文字言語に先だつものであるから、「話し方」は文字言語から離れた自由な立場から指導すべきものとする考は一面の理であつて、實際的效果も甚だ疑問である。國民科國語に於いては、「話し方」の時間を特設しないのを建前とし、「読み方」「綴り方」等と密接に關聯してその基礎練習を行ひ、更に他科目他教科に於いて常に話し方指導の擴充を期することとしたのは、専ら音聲言語と文字言語との關係に鑑みて實際指導に意義あらしめ、實績を收めんがためである。

即ち先づ「読み方」に即して兒童に自由簡明に發表させる機會を與へ、話す心構を作らせることを手始として、一面にはこれをことばの躰や、「読み方」の文章に即應しつつ次第に醇化し、他面に「綴り方」に延長して文字言語化しつつ統制し、その間絶えず兒童の音聲言語を指導して、不完全より完全へ、正確へ、雅馴へと進展させることを心掛くべきである。在來「話し方」と稱して兒童にお伽話や體驗を語らせ、それが言語發表として不完全であつても何等指導に工夫しないやうな、だらしのない「話し方」でなく、躰を中心とした齒ぎれのよい「話し方」に導くことが大切である。

もとより時宜に應じて時間を特設し、感興深き兒童の共通話題を中心として談話させ、進んでは多數の面前で演述させることも大切であるが、しかも絶えず醇正なる言語の指導をすることを忘れてはならない。

「話し方」の半面たる「聴き方」に至つては、更に將來の研究を要するのであるが、先づ人のことばを落着いて聞く習慣を早くから養ひ、進んでは聴いた話の要領を語らせ、感想を述べさせる等、發表の進展と相即してその實

際を工夫すべきである。

なほ「話し方」の指導は、常に修身の禮法と結び、禮の精神を言語の上に體現せしめる指導が大切である。他人の感情を害し、他人の非を擧げて快しとするやうな言動を戒むべきはもちろん、口先のみ巧みで、然諾を重んじない氣風をなさしめるのは更に禁物である。如何なる場合に如何に言ひ、如何に言ふべからざるかをわきまへしめ、進んでは巧みに語る人に對してはよき聴き手となり、ことば少き人に對してはよき話し手となる等の社交上の心構をも一應は指導すべきである。

(3) 國語愛護と國語の醇化

國語が單なる思想發表の具でなく、國民的思考感動の結晶體であり、國民の思想精神と不可分のものであることを考へるとき、我々は今更に國語の重大な意義を知るとともに、如何にこれを尊重愛護しなければならぬかを痛感する。随つて國語指導は國民をして國語の重大性に目醒

めしめ、國語尊重愛護の念を啓培することに徹しなければならなくなつて來る。

國語の尊重愛護は、國語に對する道を闡明し、これを實踐することである。さうして國民學校に於ける國語指導は、先づその實踐によつて國語の規準法則を體得させ、進んで國語の特質を知らしめ、國語を醇化愛護するの念に培ふことを任とすべきである。

即ち國民學校に於いては、先づ發音を正し、抑揚に注意することによつて國語の道の實踐に入らしめる。發音を正しくすることは、在來既に久しく唱道せられ、一部教育の實績に見るべきものがないではないが、國內全般としては前途なほ甚だ遼遠の感がある。抑揚にはいはゆるアクセントをも含めていふのであるが、これが實際指導は更に多難であることを思はせる。しかし今日、國語が東亞共通語として重大な役割をなさんとしつゝあるを見れば、その發音なりアクセントなりは、在來の如く方言的に放置せらるべきでなく、話しことばとしての標準語の指導とともに、

發音・アクセントの醇化統一を徹底し、以て東亞共通語として、更に進んでは世界語としての文化的資質を備へしめることが今日の急務であり、しかもそれが専ら教育によつて果されることを考へなければならぬ。發音・アクセントばかりでなく、國語はなほそれ自體の法則を有する。

我々が日常使用する國語が、この法則に支配されておればこそ、我々はその意義を解し、又誤なく傳へることができるのである。國語の法則は即ち語法であるが、我が國語の語法は、所謂文法として一見簡單であるやうであつて、その實運用の上に甚だ微妙性があり、それがことばの選びや、言ひまはしにまで延長して修辭法に密接なつながりを持つてゐる。國語指導はこの點に鑑み、適宜語法・修辭に注意し、無意識的な使用を意識化し、法則の體得實踐に導くことが大切である。國民學校に於いては、敢へてそれを系統的的に授けることを期するものでなく、重點的に指導し、しかも常に實踐的に導くことをなさなければならぬ。

かくの如くして國語指導は、音聲言語に於ける標準語の使用のみなら

ず、文字言語に於いても常に醇正なる國語の使用に留意し、これを他科目他教科の指導に擴充するはもちろん、兒童の生活の上にまで體現させることを目指さなければならぬ。そこには非常の困難があり、在來の國語指導はこの困難を克服することに於いて甚だ不徹底であつた。しかし試みに臺灣・朝鮮・南洋に於いて正しい國語の普及徹底を期し、その他外地に於いても、この理想の實現に努力しつつある今日であることを思へば、國語指導は正に在來の墮眠から目醒めなければならぬ時である。

國語愛護の精神に培ふためには、以上の如き實踐的指導と共に、なほ理念として國語の特質をも或程度認識させることが大切である。

例へば我が國語はこれを歴史的に見るとき、未だかつて外國語に征服されたことのない國語であり、肇國以來連綿として傳統し、發展し來つた國語である。よし多數の漢語及び漢語法を取入れ、又近世歐米語に若干の影響を受けたとはいへ、國語の生命は脈々として連なり、生々發展し來つたのである。この歴史面から見て我が國語は、一面に包容性に富むと

ともに他面に儼として純粹性を保つてゐる。「あはれ」「うれし」「かなし」等、多數のやまとことばが、殆ど上代そのままの姿で、今日の生活語に用ゐられてゐることや、純粹なやまとことばによつて表現される和歌の如き文學が、國初以來傳統し來り、しかも現代に於いていよいよ盛に行はれてゐることなどにそれを見ることが出来る。しかも我が國語は前述の如く歴史的に外國語の影響を受けたことも多大であつて、そこに包容性のあることは見遁し得ないところである。この點から往々國語の混亂を來たすのであるが、そこに又我が國語が世界語として發展すべき素質を藏してゐるとも見る事ができるのである。

又我が國語をその表現に即して特質を考へるとき、和歌俳句の如き短い文の中に豊富な意味感情を盛り得る含蓄性があり、しかも又物語文學の發達に見る生活の精細な描寫をなし得る描寫性を併せ具へてゐることが、何よりも著しい特徴として考へられる。

かくの如き國語の特質を知らしめることは、やがて國語愛護の念に培

ふゆゑんであり、更にその尊重愛護が一面の理に走つたり、末梢に流れたり、乃至頑迷固陋に陥つたりせしめないゆゑんになるのである。

國語は生命體であり、常に生動し發展するものである。随つてこれを使用する國民の心掛如何によつて國語はよくもなればわるくもなるのである。我々が發音を正しくすれば、國語そのものの發音が醇化される。我々が醇正な國語を使用して話し、又文章を書けば、國語そのものが次第に醇化される。ここに國民として國語に對する實踐道があるのである。されば、醇正な國語とは、決して固定した觀念のものでなく、將來の國語に對する理想をもつて考ふべきものである。即ち國語の醇化は、單なる外國語の排斥でもなく、翻譯語の忌避でもない。要は國語の法則に基づき、特質に鑑み、又その傳統と實際に照らしつつ、音聲言語に於いても文字言語に於いても平明雅馴を保ち、文化性創造性を賦與することに努力すること以外ならぬのである。

三 國民科國語教科書

(1) 編纂方針

國民科國語教科書は、國民科の教科書であり、随つて國民科全般に通ずる教科書の編纂方針に基づき、これを國語の立場から具體化することによつて編纂される。

先づ國語教科書の教材は、醇正なる國語を通じて國民精神を涵養し、情操の醇化、創造力の啓發に資し、併せて國語愛護の念に培ふものであることを期する。

さうして、これらの教材は第一期乃至第四期の段階に即して排列されるのであるが、國語教材はその表現面たる文章と、素材たる表現對象との二つの方面から排列を考慮し、系統を樹立しなければならぬ。

文章の系統 第一期は言語の發生系統を考慮して叫び聲・獨言・對話その他専ら主體的な敘述を按配し、第二期に入つて次第に客觀的な敘述に移り、第三期に至つて口語文・文語文に分化する。第四期には更に文語の書簡文や名家の作品をも採擇する。なほ韻文としては、第一期の叫び聲から出發して、第一期第二期を通じて童謠・童詩の類を排列し、第三期に入つて現代詩和歌・俳句等に分化せしめる。

表現對象の系統 表現の對象は兒童の生活から出發して國民生活の諸相に分化展開させる。即ち第一期は専ら遊戲・童話等を中心とする兒童生活を表現の對象とし、これを以て第二期以降の教材の母胎たらしめる。童話は傳説・寓話等を経て、第二期に於いて神話・英雄物語に移行し、第三・四期に於いて更に歴史物語・歴史的文化財に發展させる。遊戲は、模倣・作業運動・觀察等を経て、次第に現代の國民生活・文化の諸相に展開させる。特に第一期第二期に於いては修身教科書と相俟ち、國史及び地理の教材の萌芽を啓培して、第三期にそれぞれ科目を分ける母胎たらしめる。

以上は第一期乃至第四期の國語教科書の教材の體系であるが、なほ文字・語彙・語法の提出も亦右體系と相俟つて自ら基準が定まるのである。今その提出の基準を極めて概括的にいへば次のやうである。

- (1) 簡單にして基本的なものから始め、次第に複雑なものに及ぶ。
- (2) 兒童の生活や心情に關係の深いものから始める。
- (3) 具體的意義を有するものを先にし、抽象的意義を有するものを後にする。

(2) 第一期の國語教科書

第一期の國語教科書として「ヨミカタ」と稱する國語讀本と、これを言語的作業的に展開する「コトバナノオケイコ」と、更にこれを國語指導の全分野に擴充する「ヨミカタ教師用書」の三種を編纂する。いふまでもなく前二者は兒童用書であり、後者は教師用書である。なほ第一期に於いては掛圖をも編纂する。

在來の國語讀本に該當するもので、卷一から卷四まで之を一聯として見るべき組織を有する。

特に卷一は第一部乃至第三部から成り、専ら言語の發生系統を考慮してこれを具象化した形にできてゐる。即ち第一部は兒童の主體的な叫び聲及びそれからやや發展した韻律的言語を教材とするもので、その排列は發音指導の展開に即せしめたものが多く、随つてこれをできるだけ大きく叫ばせることによつて發音の基礎練習をなさしめ、且訛音の矯正につとめしむべきものである。第二部に入つて先づ躰の言語を與へ、これを手がかりとして教養ある言語への關心を高め、教養ある話しことばを基礎として兒童の生活を表現するとともに、旁ら第一部の素朴な韻律的叫聲を調へて次第に童謠童詩に展開し、第三部に入つて童話的敘述に移行する。

卷二以降卷四に至る教材の文章は、専ら卷一のそれを母胎として展開し、次第に複雑と深みとを加へて行くのであるが、しかもこの四卷を通じて注意すべきは、表現が常に兒童の主體的態度に即して、あるがままに客觀的に敘述されてゐないことである。動物はもとより、心なき自然物が多かれ少かれ擬人化され、童話化されてゐる。更にこれと同じ立場から、敬語の使ひ方にも略一貫してゐるものがある。即ち、おとうさん、おかあさん、おばいさん、おばあさん等の言動を敘述する場合、常に敬語的に表現されてゐる。これら目上の人の行動は、「オッシャイマシタ」であり、「イヤッシャイマシタ」であり、「ホメテクダサイマシタ」であつて、「オトウサンガイヒマシタ」「オカアサンガイキマシタ」などいふ言ひ方は、「モモタラウ」「花サカチヂイ」の如き説話的敘述の外には全くないのである。これが第二期以降に於いて、徐ろに「オトウサンガイヒマシタ」「父ガイッタ」といふやうな敘述の客觀性へ進展するのである。

しかも第一期は國語指導上、話しことばの基礎練習をなさしめる重要

な時期であるに鑑み、この期に於ける散文教材は敬體口語文を以て建前とし、僅かに韻文の一部に常體口語文を用ひた。これは大體在來と同じ行き方ではあるが、しかも在來以上に音聲言語を重視する立場から、巻一巻頭の二教材は文字を用ゐず、専ら兒童の話合のための教材とした。僅か二教材に過ぎないのであるが、これによつて先づ文字以外に國語指導が存在することを宣言するとともに、この精神は「ヨミカタ」の教材のすべてに亘つて音聲言語指導の重要性を物語るものであることを忘れてはならない。

なほ、音聲言語指導を重視する立場から、「ヨミカタ」に對話教材、劇教材を多く挿入したばかりでなく、すべての教材を音聲言語として取扱ふべき手がかりを、「コトバノオケイコ」に示し、教師用書に於いて更にこれを擴充した。

第一期に於いては全教科の教科書に亘つて、童心を重んじ、躰及び初步訓練を重視すること、全國に共通な兒童生活に取材し、生活層に隨つて教

材を排列すること、各教科に亘り或程度共通な事項に主題を求めて教材を作成すること、兒童用書に登場する兒童人物の名、性質等をなるべく一致させること等、細心の注意の下に編集されてゐるのであるが、これらは兒童生活の全體的表現を期する「ヨミカタ」に於いて、最もよく體現されてをり、單に國民科教科書として、「ヨイコドモ」と一體たる關係にあるばかりでなく、理數科、藝能科の各教科書と殆ど餘すところなきまでに連絡相即してゐるのである。けだしこの期に於ける兒童は、見方、感じ方、理解の仕方、に於いて未分化的であり、全體的直觀的である關係上、これによつて學習を未分化的全體的ならしめることを期するものである。

しかもかくの如く兒童心身の發達に即應して細心の考慮をなすことは、決してかつての兒童中心主義の如く、兒童のために兒童を開放せんとする自由主義からなされるのではなく、どこまでも兒童を皇國民として鍊成するための過程として教育的方法の遺憾なきを期する立場からなされてゐるのである。隨つてこの第一期と雖も、兒童の生活に即し、その心

情理解に適應する限りに於いて、國體の尊嚴にめざめしめ、敬神崇祖の念に培ひ、高度國防國家體制の確立に資するやうな事項はつとめてこれを採擇し、「ヨイコドモ」「ヨミカタ」一體たる立場に於いて、互に提携し相補ひつつ國民科教科書たるの面目を發揮してゐるのである。

しかも、「ヨミカタ」教材の特色は、かくの如き事項を決して理念的に注入するものでなく、どこまでも國語の力を通じて感動的に與へようとするものである。即ち國語の教材は、その表現をはなれて成立するものでなく、教材の精神は表現の進展と相俟つて次第に擴充し、浸潤するのである。かくの如くにして、「ヨミカタ」四巻を通じ、教材は彼此關聯し相互に展開發展しつつ、殆ど網の目の如く相結んでゐるのである。

先づ「アカイアサヒ」「ヒノマルノハタ」(卷一)、「日本ノシルシ」(卷二)、「富士の山」(卷四)に國土の誇が漸層し、これらが「二重橋」(卷三)、「菊の花」「金しくんしやう」(卷四)を中核として國體の尊嚴を具象化し、これらと結んで、「ハトコイ」と呼び、「コマイヌサン」と呼びかけ、「オミヤノ石ダン」を登り、「オハカノサウヂ」を

し、(以上卷一)、「お祭」に參拜し、(卷三)「神だな」(卷四)を飾る一聯が敬神崇祖の精神を目ざめさせ、祖父の父を見る「ユメ」や、「机とこしかけ」の話や(以上卷二)「祖父の語る」「川」の話(卷三)が、兒童の生活を過去の傳統に結び、「シタキリスズメ」や「モモタラウ」や(以上卷一)、「サルトカニ」「花サカチヂイ」(以上卷二)の童話から、「うらしま太郎」(卷三)、「早鳥」「羽衣」(以上卷四)の傳説、「國引き」(卷三)、「白兔」(卷四)の神話への連繋が、歴史的色彩を次第に濃厚にする。あらゆる自然教材がこの國土の美しさをたたへて文學を育てるとともに、地理や理科を育てるのである。しかも、「ユフヤケコヤケ」を歌ひ、「カクレンボスルモノ」を叫び、「ココハドコノホソミチダ」に遊び暮らし(以上卷一)、「ねんねんころりよ」(卷二)の歌に夜の夢を結ぶ古謠の魅力が、今も兒童を健やかに育くんでゆくのである。

尊い國柄、美しい國土の四面は海である。「イゲニフネ」を浮かべ、「日本ハウミノクニ」とたたへ(以上卷一)、「山ノ上」はるかに海を眺め(卷二)、「遂に」「海」へ來てその躍動の姿に驚喜する(卷三)。この海を越えて、「ラジオノコトバ」が世界に擴がり、「西ハタヤケ」の滿洲をしのび(以上卷二)、「滿洲の冬」を眺め、「金の牛」の物

語を聞き、支那の子ども(以上巻四)を讀んで東亞新建設の相をまざまざと見る。そこで子どもらは「ラジオ体操」をし、「校庭の遊戯」をし、「ハイタイサン」の畫をかき、「キヲツケ」の號令で兵隊ごっこをし、(以上巻二)「兵タイゴッコ」の劇を演じ(巻二)、「ヒカウキ」(巻二)や「らくかさん」(巻三)に夢中になり、あつばれ「軍かん」通となり(巻三)、「こうあほうこう日」に感激し(巻三)、「海軍のにいさん」を喜び迎へ、「にいさん」の入營を送り、「病院の兵たいさん」を見舞つて、(以上巻四)やがては自分も大君の御楯と立ち、科學國防の戦士となり、銃後のまもりを堅くする心構をつくりつつあるのである。

かく觀じ來れば、「ヨミカタ」の教材はその一つ一つが、それぞれの意義と感動を有するばかりでなく、それらが相即展開するところにいはゆる高度國防國家體制をさながらに具現し、意義と感激をいよいよ深からしめるものがある。指導者はこの點に留意し、徒らに一教材に踟躕して抽象的理念を注入することなく、常に全般の教材を見通し、表現の具體に即し、連絡の絲をたどりつつ取扱ふことが大切である。

なほ文字の提出に就いて在來の方法を改めた點を述べると、大體次のやうである。

(1) 新出讀替の文字を兒童用書の欄外に掲げなかつたこと

新出並びに讀替の文字を兒童用書の欄外に掲げることは、國語讀本の長い傳統であるが、これがためにややもすれば國語指導即文字教授の感を抱かしめ、指導方針を誤る向がないでもなかつた。殊に音聲言語の重要性を認め、音聲言語文字言語兩面に亘つての理會力發表力を修練する國民科國語の立場からすれば、この方法は絶対に改める必要がある。よつて在來の方法を變更し、兒童用書の欄外に文字を掲げないこととしたのであるが、しかし兒童用書の卷末及び教師用書の各課に於いて仔細に指摘し、以て指導上の手がかりとした。もちろんかくの如き方法の變更は、決して文字の意義を軽く視たのでなく、國民科國語に於いては、國語そのものの指導を徹底せしめる點からして、ことばとともに文字指導の任務は寧ろ一層重要である。

ことを考ふべきである。

(ロ) ひらがな初歩の練習を専らコトバノオケイコに譲つたこと

カタカナによる教材に習熟してから、これをひらがなに置きかへることに就いての在來の方法は、合理に偏して一時教材の質を低調ならしめ、却つて學習の實際に即しないものがあつた。よつてひらがなの提出及び初歩練習は、専らコトバノオケイコに譲り、「ヨミカタ」と相俟つて習熟せしめることを期した。

(ハ) 漢字の提出

教材が單純で、しかも兒童の器械的記憶力の旺盛な時期に漢字を多く提出することが適切であることは、教育の實際に於いて意見の一致するところである。小學國語讀本が既にこれを或程度實行して來たのであるが、國民科國語教科書に於いては一層その程度を進め、第一期及び第二期に於ける漢字數を在來よりも多くし、第三期第四期に於いてはこれを減少して、専ら漢字使用の應用を自在ならしめ

ることを期した。

コトバノオケイコ

「コトバノオケイコ」は、「ヨミカタ」に相即して、兒童に國語活動をなさしめるための編纂物である。「ヨミカタ」と一體のものであり、「ヨミカタ」と同時にこれを使用せしめるものであるから、「ヨミカタ」の一課毎に、「コトバノオケイコ」もこれに應じて課が設けられてある。

その内容は、「ヨミカタ」の教材の特質に應じてそれぞれ變化はあるが、大體に於いて「ヨミカタ」の教材を話すことに發展させる部分、發音語法、カナヅカヒに注意せしめる部分、綴り方へ橋渡しをする部分、書き方を修練せしめる部分等から成立ち、時に教材を劇化し、補充的な教材を挿入した部分などもある。

要するに「コトバノオケイコ」は、兒童が「ヨミカタ」を理解する手がかりとなるものであるとともに、これにすがつて働くことによつて、自ら國語の

道を實踐するものである。又これを指導する側からいへば、読み方指導の指針となり、その擴充ともなるのである。随つて「コトバノオケイコ」の存在は、別段兒童の負擔を重くするものでもなければ、授業の時間に影響を與へるものでもないのである。

兒童にいろいろな言語活動をさせて、言語文字を身につけさせることは、低學年の國語指導として極めて大切なことであるが、しかしそれは實際指導に於ける生きた問題によつてこそ生きた指導が行はれるのであつて、これを豫め教科書の上に規定することは、ややもすれば教材を死物たらしめ、指導を固定せしめる結果に陥りがちである。随つて「コトバノオケイコ」は、問題を極めて重點的に選り取り、取扱の基準と方向を暗示することに止めた。指導者はこの精神に鑑み、つとめて指導の實際に即して問題を生かすことにつとめることが大切であり、特に煩瑣に陥るが如きは絶対に戒むべきである。

教師用書

「ヨミカタ」は國語教科書の中軸であり、これを兒童の國語活動にほぐしたのが「コトバノオケイコ」であるが、更にこの二者を包括して國語指導の全分野に擴充するのが、この「ヨミカタ教師用書」である。名は「ヨミカタ教師用書」であるが、實は國語教師用書なのである。

「ヨミカタ教師用書」は、「ヨミカタ」の教材に即して教材の趣旨、文章、取扱の要點、注意すべき發音、文字、語句、語法等、備考の五項に分つて説明し、更に附録及び綴り方指導要項、話し方指導要項が併せ掲げてある。今これらの項目に即して簡単に説明と注意とを加へておく。

(イ) 教材の趣旨

主として教材を採擇した意義を説き、随つて教材の目的を述べる部分であるが、読み方教材の意義や目的は決して一言で盡くせるものでなく、見方によつていろいろの面に擴げて考へられるのが常であり、又或

程度それが當然でもある。大體教材の思想感情に即して解説したのがこの項で、それは専ら指導の心構ともなり注意ともなる部分である。決してそのままを児童に與ふべきものではない。なほ卷一に限り、次の文章に關することもこの項に簡單に述べてある。

(ロ) 文章

教材を表現面に即して説明した部分で、これも亦主として指導の用意として掲げたものであり、そのまま児童に與へるものと考へてはならない。

(ハ) 取扱の要點

教材の如何なる點を如何に児童に與へるかに就いて重點的に示したもので、卷一ではそれをやや順序的に説き、卷二以降は「讀むこと」「話すこと」「書くこと」「文字の指導」ことばの仕事等に別けて項目的に列擧してある。しかし何れにせよ取扱の重點を示すのが本旨であり、順序を説くのが本旨ではない。元來取扱の順序の如きは、指導の實際に即して

きまることであり、又指導者の好む方法によつてもきまることであるから、卷一と雖も決してその順序に従ふべきものと考へなくてよい。

今、更にこれらの細目に就いて一通り説明する。

讀むこと は朗讀を主體とし、齊讀、微音讀、默讀等、或はその場合に應じ、或は児童心身の發達の程度に應じて適宜採用さるべきであるが、要するに讀むのは文字言語を理解し、それを通して児童の體驗や思想を豊富ならしめるのが目的である。随つて「讀むこと」は決して直接に實物によつて理解させることなく、文章を通すことによつて理解させるのが本體である。もちろん文章の理解を助けるために説明を加へ、又實物を觀察させることも或程度大切であらうが、それはどこまでも文章理解の手段であることを忘れてはならない。

なほ「讀むこと」は反復的に習慣づけることによつて正しくも讀み、理解に到達し得るのであるから、何れの児童にも反復して讀ませるやうにすることが大切である。

しかも音聲言語指導の立場から、先づ「読むこと」に於いて正しい發音の練習をさせ、訛音方言を矯正することが極めて肝要であり、それもできるだけ早期に於いて基準を示し、これによつて習慣づけるやうにすべきであるから、卷一に於いては特に發音上の注意が具體的に示してある。

「読むこと」には當然解釋を伴ふ。いはゆるセンテンスメソッドの觀點から、最近語句の解釋を等閑視する傾向があるが、兒童の理解力を向上せしめるには、何を措いても反復朗讀させることと、語句を適切に解釋することが大切である。解釋はできるだけ具體的になすべきであり、低學年に於いては、「ことばの仕事」と相俟つて動作に訴へさせ、又必要に應じては方言と比較して意味を把握させることも機宜を得た處置であらう。

「話すこと」 「読み方指導」に於ける「話すこと」は極めて簡単な發表をさせることを目標とする。即ち教材を共通な話題として兒童と問答し、簡明

な話をさせることを意味するのであつて、指導者は絶えずその話に留意しながら、よきことばを取上げ、誤れることばを正し、つとめてことばとしてよき發表に導くやうにし、これによつて「話し方」の基礎練習をなさしめるとともに、「ヨミカタ」教材の理解に資するものである。しかも「ハイ」「イイエ」「何々デス」「何々ダト思ヒマス」「サウデハアリマセン」「マチガヒマシタ」「ヨクワカリマシタ」の如き發表を絶えず練習させ、これを身につけさせることが最も大切である。

在來も「読み方指導」に於いて種々問答や話合は行はれたが、それは多く教材の意義に踰越し、甚だしきは教材から或種の理念や思想を導き出さうとする底のものであつた。兒童の理解に負擔のある話題では、言語練習には役立たない。ここに「話すこと」といふのは、専ら兒童に言語の躰をなすとともに、教材に即して兒童の心情を明朗に端的に發表させることを期するものである。

書くこと 「コトバノオケイコ」に鉛筆による「書き方」手本が示されてある

のでもわかるやうに、この「書くこと」は、書き方指導を主體とするが、更に
 なほ適當な書寫及び書取の指導をも含むものである。卷一・卷二に於
 いて手本に點線の文字が併記してあるのは、いふまでもなくそれをな
 ぞらせることを意味するが、ただそれだけで終るのでなく、更に筆記帳
 に反復して書かすべきである。すべて手本の分量は最少限度に止め
 てあるから、指導者はつとめて「ヨミカタ」の中から適當の教材を選び、書
 寫又は書取を行はせ、書くことによつて文章を理解させるとともに、文
 字の記憶を確實にし、又筆寫力を養成すべきである。なほ「書き方指導
 に關する注意が附録に掲げてあるから、藝能科習字と相俟つて適切な
 指導をなすことが大切である。

文字の指導 新出並に讀替文字を中心として指導することは、いふまで
 もなく、常に書くことと關聯して文字の記憶を確實にすべきである。
 次にカナヅカヒに就いては、主として「コトバノオケイコ」に掲げられた
 ものに就いて適切な指導をする。

元來カナヅカヒの學習に關しては、これを非常に困難なものとして最
 初からその指導を放棄するものと、又反對に字音ガナの末に至るまで
 強制して兒童を無用に苦しめるものがある。

カナヅカヒの指導に際し特に重視すべきは、それが我が國語の法則に
 關係し、隨つて廣く國民生活・國民感情にまで喰入つてゐる部分であつ
 て、兒童にとつて將來漢字の中にかくれるやうな字音ガナの如きは、大
 部分讀ませる程度に止むべきであり、國語カナヅカヒと雖もカナ書に
 する習慣の少いものは、強ひてこれを穿鑿すべきでない。故にカナヅ
 カヒの指導に當つて最も大切なのは、助詞と用言の語尾と、その他極め
 て少數のものに限られることになる。「コトバノオケイコ」には今日實
 際生活上極めて必要な部分を選択し、法則的に關係あるもの、使用上極
 めて誤られ易いものを、或は類別的に或は對照的に排列して、兒童の理
 解と直觀に訴へ、且同じ種類のことを幾度か反復することによつて記
 憶の手がかりとした。指導者はこの點に留意して適切な指導をなす

ことが大切である。

ことばの仕事 言語を動作にあらはすことによつてその意味を理解させることは、低學年の指導に於いて極めて適切なことである。「コトバノオケイコ」には、「ヨミカタ」の教材中から、動作にあらはし易い短文を選んで掲げてあるが、敢へてこれに限らず適當の語句文章を選んで隨時動作化させるがよい。兒童劇はいはば全文を動作にあらはさしめるものである。なほこの外に、文章中に語句を記入させたり、語彙語句によつて文章を作らせたりすることも、「コトバノオケイコ」にその例が多いのであるが、これらは「読み方」指導の擴充であるとともに、一面「綴り方」への橋渡しをするものである。

(二) 注意すべきことば 文字 語句 語法等

地方的に誤られがちな發音、訛音方言等を指摘して矯正の手がかりとし、新出讀替の文字を掲げて文字指導の便りとし、又注意すべき語彙語句、語法、修辭等を重點的に掲げて指導上の参考としたのがこの項であ

る。特に卷一に於いては訛音方言等に関し、やや詳細に引用注意して發音の基礎練習に資してある。

アクセントに就いては、特に誤られ易いもの、同音異語に関するものに就いて注意を促す程度に留めてある。

(木) 備考

教材相互の連絡、「ヨイコドモ」の教材との連絡、他教科の教材との連絡を指摘して取扱上の考慮を促し、又極めて必要と思惟せられるものに限

り、教材の参考資料、出典等を掲げたのがこの項である。元來「読み方」教材は、文章そのものが教材であつて資料や原據は單なる素材に過ぎないのであるから、これによつてみだりに教材を補充したり、殊に單純化することによつて始めて教材となつたものを逆に複雑にしたりして、兒童を困惑せしめ、況んや資料原據によつて教材を變更するが如きは最も戒むべきである。かかる見地から、資料や出典の掲載はできるだけ少數の限度に於いてなしたのである。

附 録

附録として次の四つのものが掲げてある。いづれも指導上の参考に資するものである。

新出讀替文字一覽

運筆順序

鉛筆による書き方指導上の注意

「ヨミカタ」の發音

右に就いては一々説明するまでもないが、ただ「ヨミカタ」の發音に就いては一言を要する。これはカタカナを發音符號的に使用し、「ヨミカタ」教材全部をこれによつて表記し、ガ行鼻濁音に記號を附したものである。

綴り方指導要項

話し方指導要項

「綴り方」話し方ともに教師の實際指導に俟つて始めて生かされるのであるから、特に教科書は編纂しないのである。しかも大切なことは、どこまでも國語指導の精神に鑑み、各分節が密接に提携して行はるべきことであり、「話し方」の如きは施行規則にも時間を特設しないことが建前となつてゐる。

この見地から新たに「綴り方」話し方ともに要項を定め、第一期乃至第四期に即する指導段階を設け、更に各學年の指導に就いてその大綱を定めた。

なほ「綴り方」は右大綱の外に、参考として各學年の文題をも併せ掲げた。これら文題は、廣く「ヨイコドモ」「カズノホン」「自然の觀察」「ウタノホン」「エノホン」等の教材と連絡を取り、兒童生活の實際を考慮して選んだもので、かくの如くして「綴り方」に於いても亦國語表現の全體性の發揮を期するのである。

「話し方」はこの要項に定めたところに隨つて、一面には「讀み方」指導に即

して基礎練習をなさしめ、一面には兒童の自由な發表を「綴り方」と結んで音聲言語の醇化をはかり、更に各教科の指導及び兒童の生活に即して絶えずよき言語を躰けることを心掛くべきである。なほ、時に時間を特設する場合には、「綴り方」指導要項に掲げた文題を参考とし、これを話題として指導することも可能であらう。

掛圖

第一期に於いては「讀むこと」「話すこと」一體たる立場から、掛圖は「讀み方」教材の一部として、文章挿畫と一体的に取扱ふやうにすべきである。「ヨミカタ」から離れて、これと無關係に掛圖のみを取扱ふ弊におちいらぬ注意が肝要である。

各 説

一 ラジオ体操

教材の趣旨

教材は、櫻の花の爛漫と咲いてゐる校庭で、全校の児童が朝のラジオ体操をしてゐる光景をあらはした繪である。話し方・読み方未分化の教材で、児童の實際の経験や見聞と結んで、この繪を主題に先づいろいろの話をさせる。即ち入學の喜びや、春の楽しさ、花の美しさ、元氣でほがらかなラジオ体操等に就いて話をさせ、最後に体操の號令「一二三四、五六七八」に導き、特に「一二三四」を焦點として發音の訓練をする。

四拍子のリズムを有する叫び聲であるから、リズムの快感にひたらせつつ、大きく叫ばせ、正しく發音させる。發音の覗ひどころは、主として「イ」母音である。それは「イチ」の「イ」に限らず、「チ」も「ニ」も「シ」も「イ」が共通母音であることに留意して指導することが大切である。

取扱の要點

ヨミカタの繪(掛圖)のあらはす愉快で潑刺たる光景を読みとらせ、兒童の體驗や見聞と結んで簡単に愉快に話をさせる。すべての兒童に話をさせることが大切である。しかも、指導者は兒童の勝手な話をよく整理しながら、最後にラジオ體操の號令「二二三、四五六七八」に導き、特に「二二三、四」を當面の問題とする。

號令「二二三、四」はリズムある叫び聲であるから、指揮棒を振り、又は體操の動作と結んで、リズムの快感にひたらせながら、兒童に大きく、ゆつくり叫ばせることが大切である。發音の基礎練習として叫び聲を教材とするのは、一つには、正しく發音せしめるためであることを留意して取扱ふべきである。

注意すべき發音

「イ」を「エ」と誤り、「チ」を「ツ」、「ニ」を「ヌ」または「ネ」、「シ」を「ス」と誤る地方は甚だ多い。これらは、その一つ一つを分離して別々に矯正することも大切ではあるが、常に母音「イ」を基礎として正すことが肝要である。その意味に於いて、「イチ」「ニ」「シ」の如き「イ」音を共通母音とする音の連続する本教材の叫び聲は、頗る有効と思はれる。敢へて本教材に限らず、「キ」「シ」「チ」「ニ」「ヒ」「ミ」「リ」の發音の不完全な地方では、常に五十音圖のイ列の

聯關に於いて、基礎母音「イ」の矯正をもととする心掛が大切である。

備考

本課及び次の「校庭の遊戯」は、ヨイコドモ上「ガクカウ」と連絡して取扱ふ。自然の觀察
一「學校の庭」「ウタノホン上」「ガクカウ」と連絡して取扱に考慮する。

二 校庭の遊戯

教材の趣旨

教材は校庭に於ける兒童の愉快さうな遊戯をあらはした繪である。これも前課と同様、話し方・読み方未分化の教材で、兒童の實際の體驗や見聞と結んでこの繪を主題に、先づいろいろの話をさせる。繪の大部分は、校庭で一年の兒童が先生に導かれながら楽しさうに圓陣を作つて行進するところ、左の上部は上級の兒童が巧みに飛び箱の上で逆立ちをしてゐるところである。さういふことに氣づかせながら、次第に

話を進めつつ、「オモシロイナ」「ウレシイナ」「エライナ」といふ歎聲的な叫び聲に導いて行く。これも大きく正しく、ゆつくりと發音させる。さうしてコトバノオケイコの繪と結んで、更に話合をさせ、「ウレシイナ」「オモシロイナ」「エライナ」のことばの練習をさせる。

發音練習の主たる視どころは、「ウ」「オ」「エ」の三母音であるが、前課と關聯して、「シイ」「ロイ」の發音にも或程度の指導を要する。

取扱の要點

ヨミカタの繪及び掛圖を中心に、兒童の體驗や見聞と結んで、簡單に愉快に話をさせる。指導者は兒童の話に注意し、よく整理指導しながら、「オモシロイナ」「ウレシイナ」「エライナ」等の叫び聲をできるだけ兒童の話の中から拾ひ上げることにつとめる。

この三語を一通り發音させてから、コトバノオケイコ二頁三頁の繪と結んで、またいろいろの話合をさせ、ことばの内容を深める。

コトバノオケイコの繪は、二頁が入學祝に叔父さんからでも貰つた玩具の飛行機を飛ばしてゐる男の子と、叔母さんからでも貰つた人形を抱いてゐる女の子であつて、男

の子は飛行機を飛ばして「オモシロイナ」と感激し、女の子は人形を抱いて「ウレシイナ」の表情に充ちてゐる。三頁は犬の訓練の繪で、犬が高く跳躍してゐるのは、まさに「エライナ」の感を起させる。これらを話の主題として、「オモシロイナ」「ウレシイナ」「エライナ」の内容を深める。

この三語を、最初は別々にゆつくりと、後には或は三語を連続的に發音させて、常に發音——特に母音「オ」「ウ」「エ」の正しい練習をさせる。時に、「オー」「ウー」「エー」の如く、母音を長く引き、「オーオモシロイナ」「ウーウレシイナ」「エーエライナ」の如く發音させて、母音を正しく認識させ、正しく大きく發音させる。なほ「ウレシイ」の「シイ」、「オモシロイ」の「ロイ」、「エライ」の「ライ」は、「イイ」「オイ」「アイ」の重母音を含んでをり、「イイ」は「イイイ」でなく、「イイイ」であつて、寧ろ「イー」に近く、「オイ」「アイ」は、「オイイ」「アイイ」でなく、「オイ」「アイ」である。但し、ここに重母音といふのは嚴密な意味で歐米語の Diphthong と同一のものでなく、學者によつては連母音といつてゐる者もある。

注意すべき發音

「ウ」を「オ」と混同し、「エ」を「イ」と混同する地方では、特にこの教材によつて、母音の練習をなす必要がある。又「ウレシイ」「オモシロイ」の「シ」を「ス」と訛る地方では、前課と關聯し

て矯正に心掛くべきである。
更に「オモシレ」「エレ」、又は「オモシレー」「エレ」の如く、「オイ」「アイ」を「エー」と訛る地方もあるから併せて正すべきである。

二 アカイアサヒ

教材の趣旨

東亞日本の春の夜は明けて、東に眞紅の太陽がのぼる。「アカイ、アカイ、アサヒ、アサヒ」はこの壯美に感動した兒童の叫び聲である。
始めて文字にあらはされた文章を教材とする。しかし、ここで讀み方と話し方が全く分化したものと考へてはならない。教材はなほ當分挿畫と組んで多分に話し方を要求し、その歸結として文字教材があり、文字教材に即して書き方も必然に起つて來る。「アカイ、アカイ、アサヒ、アサヒ」は、極めて素朴な文である。眞紅な朝日の美しさに對して感

激的に叫ばれた聲である。

發音としては、母音「ア」の基礎練習をするとともに、前課の「エライナ」と關聯して重母音「アイ」を含む「カイ」を練習させる。「ヒ」の發音も指導を要する。

第一課のラジオ體操は爛漫たる櫻花の下で行はれてゐるが、本教材では壯麗な朝日が正面に出て來てゐる。自然に對する國民的な感情が教材の中に溶け込んでゐることに留意して取扱ふべきであるが、敢へてそれを兒童に説明すべきでなく、挿畫なり、文なり、話合によつて、自然に感得させる程度に止める。

取扱の要點

挿畫(掛圖)によつて先づ話をさせる。春の朝であること、子どもが五人ゐること、犬があること、みんな喜びに満ちてゐること、景色の美しいこと、眞紅の太陽が今のぼること、子どもたちがそれに感動してゐること、彼等が何といつてゐるか、などの話合から文章の取扱に入る。

兒童は始めて文字に接するのであるが、大部分の兒童はカタカナのいくつかは知つてをり、殊に父兄に教へられて、この文を初から讀むであらう。もちろん讀みは素朴で、文字を離れた暗誦的のものであらうが、それを拾ひ上げて、正確に、できるだけ自然に文字と讀みとを結合させて行く。

先づ發音に注意して指導する。第一課第二課に續いて、ここでは「アカイ」「アサヒ」によつて母音「ア」の基礎練習をする。次に重母音「アイ」を含む「カイ」の發音に注意して指導する。ここで「コトバノオケイコ」四頁の挿畫「タヒ」「アヒコ」に就いて話合をさせ、「タヒ」「アヒコ」の發音と聯絡して「アカイ」の「カイ」の發音を理解させ、練習させる。文字を一字づつ指でささせて讀ませることを敢へて不可とするのではないが、それがために「アカイ」といふやうな讀みくせをつけさせてはならない。どこまでも「アカイ」といふことばの發音を基準とし、特に重母音を含む「カイ」の發音を正しく指導すべきである。更に「アサヒ」に就いては「サ」の發音、及び特に地方的に訛られがちな「ヒ」の發音を矯正することに注意を要する。

かうして正しく讀むことができるやうになれば、「コトバノオケイコ」四頁によつて文字を書かせる。筆順を正しく指導し、點線の上を鉛筆でなぞらせ、更に筆記帳に書か

せて正しく書くことに馴れさせる。鉛筆の持方は絶えず指導する。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「ア」母音はさして誤られることはないと思はれるが、地方により又兒童によつて様々であり曖昧であるから、口を十分開かせて明瞭に發音させる。「カイ」は「カヒ」でなく「カイ」である。「アヒコ」「タヒ」又は返事の「ハイ」等と聯絡して明瞭に、しかも自然に發音するやうに導く。「アカイ」と「タヒ」「アヒコ」はカナヅカヒを異にするが發音としては共通である。又地方により「アキヤ」「アケ」などと訛るものは更に矯正的指導が大切である。

幼兒語的發音のまだぬけきらないところから、「サ」を「シヤ」と訛る者は、「サラ」「サク」等適切な例と聯絡して、できるだけ早く矯正につとめる。

「ヒ」は地方により「フ」と混同し、又「シ」「フイ」と訛るところがある。これらはハ行の關聯、イ列の關聯に於いて正し、なほ「ヒバチ」「ヒシモチ」等適當な例によつて矯正する。

文字 新字——ア カ イ サ ヒ

語句語法 「アカイ、アカイ、アサヒ、アサヒ」は極めて素朴原始的な表現であるが、「アカイゾ、アサヒダ」といつた氣持の文的表現で、決して「アカイアサヒ」といつた靜的な句

的表現ではない。もちろんかうした解釋を兒童に示すべきでなく、讀みの上にならうといった氣持をあらはすだけで十分である。

四 ハトコイ

教材の趣旨

さしのぼる朝日に對する感動から神社のお参りに展開する。先づ神社の参道の敷石に遊んでゐる鳩が、子どもに興味の中心となつて、「コイコイ」と呼びかける。挿畫(掛圖)と兒童の體驗見聞とを結んで話をさせ、その結果この叫び聲を拾ひ上げて行くことは前課と同様である。發音としては重母音「オイ」を含む「コイ」に重點がある。

なほ教材は神社の崇敬、動物の愛護等の精神にふれてをり、「ハト、コイコイ」は後者の具體的表現でもあるが、さういつた精神を正面から説明すべきでなく、自ら感得させる程度に止める。

取扱の要點

繪によつて先づ話をさせる。神社のこと、早朝の参拜のこと、その體驗感想、神社にゐる鳩のこと、鳩のかはいらしいこと、鳩に豆をやること、繪の子どもが鳩を呼んでゐること等から「コイコイ」の呼聲を導き出して、教材の文章の取扱に入る。

讀み及び書くことは前課に準じて適當に指導する。發音は重母音「オイ」を含む「コイ」を特に留意して指導する。「コイ」でなく「コイ」である。コトバノオケイコ五頁の挿畫に「コヒノボリ」があり、その下の子どもは「オーイ」と呼んでゐる。これに就いて話をさせ、「オーイ」の呼聲を基礎とし、「コヒノボリ」及び「コイ」の發音を練習させる。なほ前課と關聯して「カイ」「コイ」の正しい發音の區別と類似を知らせ、練習させる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 分析的に指導して「コイ」と發音するやうなくせを付けてはならない。又地方により「コイ」を「ケー」「コー」と訛るところでは、矯正につとめる。

文字 新字——ハ ト コ

語句語法 「ハト、コイコイ」は「ハトガキル、コイコイ」といつた氣持の表現である。「ハ

トヨ、コイコイ」と解釋しては實際生活のことばとしてやや無理がある。兒童にかうした解釋を述べるべきではないが、ただ讀みの上にその氣持をあらはし、「ハト」で句切り、やがて「コイコイ」と續けて讀むやうにする。

五 コマイヌサン

教材の趣旨

神社におまゐりした子どもが、やがて左右に並ぶコマイヌの前を通る。何氣なくコマイヌに呼びかけてみた。それが「コマイヌサン」である。見ると向かつて右のコマイヌは口を開けてゐる。「ア」と答へたやうに思はれる。今度は左のコマイヌに「コマイヌサン」と呼びかける。これは口を閉ぢてゐるから「ウン」と答へたのであらう。教材はこの時期の兒童の空想即現實の心理に即して、素朴な對話形式の上に成立つてゐる。

挿畫(掛圖)と兒童の體驗とを結んで、コマイヌのことに就いて話をさせ、適當にこの文章に導入する。

發音としては、「サン」「ウン」による鼻音の練習をなし、又「イ」「ア」「ウ」の母音を復習させる。

前課と關聯して神社尊崇の念に培ふ。

取扱の要點

豫め適當なコマイヌの實物を選定しておいて、理數科の自然の觀察などの機會に、そのコマイヌのある神社に參拜させ、コマイヌを觀察させておく。コマイヌにはいろいろあるから、(備考參照)特にこの教材に適當なのを見せる必要がある。

先づ挿畫(掛圖)と見聞とに基づいてコマイヌの話をさせる。この時期の兒童の空想現實未分化の心理に訴へて、「コマイヌサン」と呼びかけると、一方は口を開けてゐます。何と返事をしたのでせう。「一方は口を閉ぢてゐます。何と返事をしたのでせう。」等と發問しながら、次第に文章に導入する。「ア」「ウン」は特に長く「アー」「ウーン」の如く取扱ふ方が發音練習に役立つであらう。

發音として特に注意すべきは、「サン」「ウン」の鼻音の基礎練習で、鼻音「ン」は、わが國では單獨に發聲されることが殆どなく、上に來る音に伴なつて發音されるのであるから、コトバノオケイコ六頁の「インキ」「エンピツ」「イヌノウンドウクワイ」「ウンドールカイ」と發音するのを標準とする等と併せて發音を體得練習させる。(その前にコトバノオケイコの挿畫によつて適當に話合をさせることは、前課に準じる。)

次に「コマイヌ」及び「イヌノウンドウクワイ」によつて「イヌ」の發音を正確にし、更に「ア」「ウン」によつて母音「ア」「ウ」を復習させる。

読み及び文字を書くことに就いては、大體前課に準じて行ふ。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「イヌ」を「エヌ」「エン」「エニ」「イニユ」「イン」「エニユ」などといろい詛る地方があり、又兒童によつていろいろ誤ることがあるから、注意して正しく指導矯正すべきである。「コマイヌ」は「コマ」と「イヌ」の複合語で、「マ」と「イ」は「アイ」重母音を含む、「マイ」でなく「コマイヌ」と正しく發音せしめる。

「ウ」を「オ」と混同し、「ウン」を「オン」、「ウンドウクワイ」を「オンドウクワイ」などいふ地方では、母音「ウ」の矯正が大切である。

文字 新字——マヌンウ

備考

コマイヌには種々あつて、角のあるもの、ないものがあり、又兩方共に口を開けたもの、兩方共に口を閉じたものもあるが、向かつて右にあるものが口を開け、左にあるものが口を閉じてゐるのを多く見かける。教材はこの最後のものによつた。

地方によつては「コマイヌ」といはず専ら「カラシシ」で代表されてゐる。元來コマイヌとカラシシは別のものであると思はれるが、ここではさうした穿鑿をしないで「カラシシ」といふ地方では、それがコマイヌであるとして取扱つて差支ない。

「ア」「ウン」は元來佛教の阿吽から來てゐるが、ここでは決してさうした問題にふれるべきでない。ただ子どもが「コマイヌサン」と呼掛けたのに對する返事として軽く取扱ふ。又吽の發音は元來母音を含まぬ「ン」又は「ム」であるが、我が國語の發音に即して「ウン」と發音すべきである。

六 ヒノマルノハタ

教材の趣旨

天長節の朝である。これを前課の發展として、天長節の早朝、神社におまわりをし、歸途どこかで大空にひるがへるヒノマルノハタを見かけて、感激的に「バンザイ」を叫んだと見れば、教材としてなほ深みが出るであらう。(さうすれば、「アサヒ」以降は一脈の關聯を持つことになる。)

挿畫の中に子どもは出てゐない。それは「アサヒ」の構圖と重複するからであるが、掛圖には子どもが添へてある。

天長節のこと、日の丸の旗のこの話合から、この教材の文章に導入する。巻頭のラジオ體操の櫻の花以降、國民的感情はここに至つて高調する。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心として、天長節のこと、日の丸の旗のこの話合をさせ、特に日の丸の旗に就いては、旗の美しいこと、祝日や祭日などにはそれを掲げること、日の丸の旗は日本の國旗であること等を適當に話合の中心として展開させる。挿畫の右端の木ノ若葉も天長節らしい自然であることに氣づかせる。

日の丸の旗を見て「バンザイ」と叫ぶのは、國民的感情の高調した場合で、ここでは特に天長節と關聯して意義のあること、及び畫中の日の丸が如何にも雄麗で、見るものをして自ら萬歳を叫ばしめるものがあることに留意して、適當に教材の文章を取扱ふべきである。

發音としては「ノ」「ル」「タ」「バ」「ザ」等の新しく出た音を文章に即して指導し、特に兒童に困難と思はれる「ザ」「ル」に注意し、又前課と關聯して「ヒ」、鼻音を含む「バン」、「アイ」の重母音を含む「サイ」等を適當に練習させる。

なほコトバノオケイコ七頁の挿畫に就いて話させ、「クルマ」「ヒバチ」「ヒバシ」「サザエ」等の語を拾ひ上げて、「ル」「ヒ」「ザ」の練習を擴充する。

讀むこと、書くことに就いては前課に準じ、コトバノオケイコ七頁の文字を正確に書かせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「ヒ」を「フ」又は「フィ」と誤り、「マル」を「マー」と訛る地方では、これまでの教材と聯關して、矯正につとめる。「ハタ」を「ハダ」と訛る地方では、その矯正も大切である。「バンザイ」を「バンジヤイ」と誤るのは幼兒語的な發音の抜け切らないものであるから、つとめて速かに正させるやうにする。

文字 新字——ノ ル タ バ サ

語句語法 「ヒノマルノハタ、バンザイ、バンザイ」は、大體「ハト、コイコイ」と似た趣の表現で、「ア、ヒノマルノハタダ、バンザイ、バンザイ」といつた氣持のあらはれであるから、その心持を讀みの上にあらはし、「ヒノマルノハタ」と句切つて「バンザイバンザイ」を叫び聲らしく讀ませる。

備考

ヨイコドモ上「テンチャウセツ」と密接に連絡して取扱ふ。カズノホン一(三頁)、ウタノホン上「ヒノマル、エノホン一」「ハタ」「ハタヲアゲル」と連絡して取扱に考慮する。

七 へイタイサン

教材の趣旨

前課の「ヒノマルノハタ」と關聯し、ヨイコドモの天長節の觀兵式から呼起される兒童の遊戲的衝動をとらへて、兵隊の行進を遊戲的に表現した教材である。挿畫(掛圖)もこれに即應して兒童の描く畫によつてあらはされてゐる。國防的意義を兒童の生活によつて表現した教材としても注意すべきである。

「へイタイサンススメスメ」と「チテチテタ」とは不可分の教材であるが、便宜上これを分けて取扱つても差支ない。「へイタイサンススメ」は、畫中の子どもの描く兵隊の行進から、自ら呼起される韻律的な叫び聲であつて、この韻律の興味が、畫中の男の子をして兵隊を續々と描かせ、見てゐる女の子はそれをはやしてゐるやうな趣である。

この叫び聲の韻律はやがて次のラツパの旋律を呼起す。「チテチテタ」はドトタテチの階名によつて唱へられるラツパの旋律で、一般の兒童に廣く唱誦されてゐる。ヨミカタの教材であつても、この部分は曲譜をはなれては絶対に成立しない。發音としては、「へ」の長音「へい、サ行音の連続」「ススメ」及びタ行音の連続として注意すべきである。

取扱の要點

挿畫(掛圖)によつて先づ話させる。畫中の男の子は兵隊の繪をかいてゐること、女の子がそれを見てゐること、男の子はいくつもいくつもかきつづけてゐること、ラツパを吹いてゐるへイタイがかいてゐること、女の子たちはへイタイの繪を見ながら、拍子を取つて何かいつてゐること等から「へイタイサンススメススメ」の文章を讀ませ、特にその韻律的表現に隨つて讀ませる。

「へイタイ」は「へータイ」と發音するを標準とする。「い」によつてあらはされるエ列長音例へば「たい」「けい」「せい」等すべて「てー」「けー」「せー」と發音させることにつとめる。「へイタイ」の「たい」は重母音「アイ」を含むことに留意して練習をさせる。

「ススメ」は、サ行音「ス」の連続として、特に發音の練習をさせる必要がある。又「シ」「ス」の區別の曖昧な地方では、「い」「う」の母音と關聯して、正確な發音をさせる。

なほコトバノオケイコ八頁の挿畫によつて塀の上に止つてゐる雀を話題としていろいろ話させ、「へい(へー)」「スズメ」の語によつて發音練習を擴充する。

「へイタイサンススメススメ」の韻律は、やがて自ら次の「チテチテタ」の喇叭の旋律を呼起す旋律であるから、韻律とともに音の高低をも合せて讀まなければ意味をなさず、寧ろ滑稽になるであらう。

コトバノオケイコ九頁の挿畫に就いて話合をさせ、行進ラツパの旋律を更に深く味はせる。

コトバノオケイコ八頁九頁によつて文字を正確に書かせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「へイタイ」を「フェータイ」と訛り、「ススメ」を「シシメ」と訛る地方では矯正を要する。「チテチテタ、トタテテタ」はタ行音の連続で、發音はやや困難のものに屬するから、くりかへし練習させる。「ツテツテ」と訛る地方では矯正する。

文字 新字——へ ス メ チ テ

語句語法 「ヘイタイサン」は呼掛であり、「ススメススメ」は命令文で兒童の願望的意欲の發現である。

備考

ヨイコドモ上「テンチャウセツ」の發展として取扱に考慮する。
「チテテテタ、トタテテテタ」は、速歩行進の喇叭の旋律で、これを樂譜にあらはせば次のやうである。



元來は(イ)によつて唱へられ、これによれば「チテテテタ、トタテテテタ」となるが、今、これを單純化して(ロ)による唱へ方を採つたのである。

八 アヒル

教材の趣旨

アヒルが地上をややあわて氣味に急いで歩いて行く情景を主題とした教材である。子どもに追はれた時など、よく見受けられるアヒルの行動である。

「ガアガア」はいふまでもなくアヒルの鳴聲であつて、實際は「グエグエ」或は「ギャギャ」といふやうな聲であるが、多少類化して「ガアガア」といつたのである。

「ヨチヨチ」はアヒルの走り行く恰好で、水禽であるアヒルが地上を走るとき、尻をふつてよちよち歩くやや滑稽な姿をあらはしたのである。發音としては、濁音「ガ」を指導し、同時にその長音「ガア」を指導する。濁音としての「ガ」は、やがて第十二課に出る鼻濁音「ガ」の指導の前提として

大切である。

取扱の要點

豫めアヒルを観察させておけば、指導上都合がよいであらう。挿畫(掛圖)を中心に、兒童の見聞を語らせる。アヒルは水の上を上手に泳ぐこと、地面の上を歩くのは不得意であること、アヒルがあわてると、「ガアガア」といひながらお尻をふつてよちよちと走ることなど話合をさせて、文章に導入する。語の最初に來るガ行濁音は單純の濁音で、「ガアガア」はそれである。「ガラス」「ガタガタ」等も同様である。これは、第十二課の「ソラガハレタ」「ウシガナク」の「ガ」の鼻濁音を指導する前提として基礎練習をさせるものである。そこでコトバノオケイコ十頁の挿畫に就いて話合をさせ、「グンカン」「ゲタ」「ゴイシ」「ゴパン」等によつて、ガ行濁音を會得させ、練習させる。「アヒル」の「ヒ」「ル」は、「アサヒ」「ヒノマル」等と關聯して、正しく發音の練習をさせる。文章は童話的な叫び聲であるから、讀みには韻律を生かし、大きく正しく讀ませる。表現の滑稽味を讀みとらせるにはアヒルの様子を動作にあらはさせつつ讀ませるのも一つの方法である。

コトバノオケイコ十頁によつて、文字を正確に書かせる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「ガア」は長音であるから「ガー」と發音させる。「ガア」ではない。

「アヒル」を「アイル」と訛る地方ではその矯正も大切である。その外「アフル」「アヒリ」

「アフィリ」などはいづれも矯正することが大切である。

文字 新字——ガヨ

語句語法 「カアカアカラス」などと同様、兒童的な語法によつた表現である。「ガアガア」「ヨチヨチ」は「アヒル」といふ名詞を修飾するのでなく、「アヒル」の動作を修飾する副詞であるから、述語はなくても表現は自ら動的である。

備考

自然の觀察「春の野」に於いて、豫めアヒルに就いて觀察させておけば、取扱に便利であらう。

(以上 四月)

九 ハシレハシレ

教材の趣旨

アヒルの行進から発展して、春季に行はれる学校の運動會を教材の主題とする。挿畫が示すやうに、徒競走に於いて白熱する應援の聲を以て、韻律的に力強く表現されてゐる。多勢の者の交錯した聲によつて成立つてをり、特に「シロカテ」と「アカカテ」とは別々の聲であることに留意し、取扱の上に生かす必要がある。

運動會に於ける體驗や、見聞を話させ、この教材に導入して明朗快活の氣性を養ふ。

「ハシレ」「シロ」「カテ」の「シ」「レ」「ロ」「テ」等發音として指導を要する。

取扱の要點

運動會に就いていろいろ話させる。運動會で自分のしたこと、自分の級のしたこと、

上級生のしたこと、何が一番面白かつたか、白組赤組のこと、徒競走のこと、應援のことなどを話させ、更に挿畫(掛圖)を中心にして話合をさせてから、文章に導入する。

發音を正しく指導する。「ハシレ」「シロ」「カテ」等發音上注意すべきものがある。

コトバナオケイコ十一頁の挿畫によつて話合をさせ、「ハシ」「ハス」「ハナ」の語に就いて練習させる。なほ「シ」「ス」の混同はイ列の關聯に於いて正すがよい。

讀みは、韻律を生かすこと、力強く讀ますこと等何れも大切であるが、特に「シロカテ」と「アカカテ」とは、叫ぶ者が別であることに留意し、適當に扱ふ必要がある。例へば全級の兒童を二組に分けて、「ハシレ」「ハシレ」「シロカテ」「アカカテ」と交互に齊讀させれば、その趣が兒童にも理解されるであらう。

コトバナオケイコ十一頁によつて、文字を正確に書かせる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「ハシレ」を「ハスレ」「ハシデ」と訛り、「シロ」を「スロ」「シド」「シト」と訛り、「カテ」を「カデ」と訛る地方では、十分矯正につとめなくてはならない。

文字 新字——シ レ ロ

語句語法 「ハト、コイコイ」「ヘイタイサン、ススメ、ススメ」などと同様、命令の語法によ

つてできた教材である。命令形は、児童の希望的意欲の表現であつて、児童の言語として非常に一般的である。

備考

春秋二季に行はれる運動會の行事、及びカズノホナー（七八頁）と關聯して取扱に考慮する。

十 ココマデオイデ

教材の趣旨

家庭生活の一風景を主題とする。あんよを始めたばかりの幼児に「オイデオイデ」「ココマデオイデ」など呼びかけながら、愛撫の中に歩行の練習をさせるのが、日本の家庭の一般であるが、その時に呼びかけることばを韻律的な童謡風に表現した教材である。挿畫（掛圖）によると、かう呼びかけてゐるのは幼児の兄であり、その姉が幼児のそばに立つて

ゐる。文章と挿畫と組んで、家庭に於ける兄弟愛があらはされてゐる。兄が一年生で、姉は三年生くらゐと見て、児童に先づ話させ、次いで讀みにはいるべきである。發音としては、「デ」「ソ」が新しく提出された音であるが、「ココマデ」「ソロソロ」の語に即して指導上種々注意を要する。「オイデ」には「オイ」の重母音がある。

取扱の要點

家庭に於ける児童の體驗見聞等に基づいて、挿畫（掛圖）を中心にいろいろ話させる。小さい弟や妹のこと、それらのかはいのこと、何といふ名であるかといふこと、おとうさん、おかあさん、おちいさん、おばあさんなどがおかはいがりになること、自分たちがどんなに弟や妹をかはいがるかといふこと、やつと歩きかけた子どもを歩かせる時、何といふか、などの話合から、この文章を讀ませる。韻律のある文章であるから、できれば拍子を取つて讀ませるやうに指導するがよい。

發音としては「ココ」「マデ」「オイデ」「ソロソロ」等を正確に指導する。「オイデ」の「オイ」は重母音で、「オイ」である。「オ」と「イ」とを分解して「オイイデ」など讀むくせのつかないや

うにしないでならない。

コトバノオケイコ十二頁の挿畫によつて話合をさせ、「デントウ」「デンワ」「ソロバン」等の語を拾ひあげて「デ」「ロ」の發音練習を擴充する。なほ地方によつては前課と關聯して「レ」「デ」の發音の混同を正し、明瞭に發音させることも大切である。

コトバノオケイコ十二頁によつて文字を正確に書かせ、なほ時間に餘裕があれば全文を書かせる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 地方によつては、「ココ」を「コゴ」といひ、「マデ」を「マンデ」といひ、「オイデ」を「オイレ」「ソロソロ」を「ソドソド」などと訛るのがある。いづれも矯正につとめる。

文字 新字——デ オソ

語句語法 「オイデ」は動詞の「イデ」(出デ)に敬語「オ」の添はつたもので、「オイデ」は「オイデナサイ」が略された形である。元來「イデ」(出デ)は文語的語法で、口語では「デ」となるべきであるが、敬語法としては文語の形がそのまま固定して、口語に用ひられるのである。「ナサイ」の略された形は、親しい間、目下の者に對して用ひられる。

この教材も命令的語法によつて表現されてゐるが、敬語が添つてゐるだけに柔か

であり、そこに幼者に對する愛撫の心もあらはれてゐる。

十一 カミフウセン

教材の趣旨

紙風船をもつて遊ぶ兒童の遊戲を主題とした教材である。紙風船をふくらます操作、即ち「フウフウ」と吹くことと、その結果紙風船が大きくふくらんだよろこびの叫びとを結んで、韻律的に表現してある。もちろん、そこには紙風船について遊ぶ心が躍動してゐるのである。

發音としては「フ」「ク」「ミ」「セ」が新しく出て來るが、同時に「フ」の長音「フウ」にも注意を要する。「フウ」「フクレタ」「カミフウセン」等の語に即して練習させるべきである。

取扱の要點

先づ紙風船に就いての體驗を、挿畫(掛圖)を中心に話させる。紙風船の美しいこと、そ

の色のこと、どうしてふくらますかといふこと、大きくふくれた時のよろこび、つく愉快さ、畫中の男の子は何をしてゐるかといふこと、女の子は何をしてゐるかといふことなど話合をさせてから、文章に導入する。

紙風船をふくらます時、「フウフウ」と吹く音は、實際は無聲音であるが、ことばとしてあらはすものは有聲音である。随つて言語指導の上からは「フウ」の音でなく「フ」の音による。なほ「フウ」は「フ」の長音「フー」で、「フウ」と發音させてはならない。

前課及び前々課と聯關して「レ」「デ」の區別を明瞭にし、練習させる。

「カミフウセン」の「セ」は、地方により指導上注意を要する。コトバノオケイコ十三頁の挿畫に就いて話させ、「センセイ」「センセー」「セイト」「セート」の語を拾ひ上げて、「セ」の練習を擴充する。

コトバノオケイコ十三頁によつて文字を正確に書かせ、なほ全文をも書かせる。

注意すべきことば 文字 語句語法等

發音 「フクレタ」を「フグレタ」「フクデタ」など訛る地方や兒童がある。前課の「ココマ

デ」「オイデ」及び前々課の「ハシレ」などと關聯比較して明瞭に指導し、矯正する。

「カミフウセン」の「セ」は「シエ」と訛る地方に於いて特に正しく發音するやうに指導し、

今後にも常に矯正に心掛くべきである。

文字 新字——フ ク ミ セ

語句語法 「フウフウフウ」は紙風船を吹く擬聲音で、これによつて「フウフウ」と吹いてゐることをあらはしてゐる。次の「フクレタ、フクレタ、カミフウセン」は、吹いた結果大きく美しくふくれた喜びを叫聲的にあらはしたもので、「カミフウセンガフレタゾ」の心持の表現である。これを「フクレタカミフウセン」の靜的な句の表現と見てはならない。

「フクレタ」の「タ」は完了の助動詞である。

十二 ウシ・ヒバリ

教材の趣旨

自然の觀察の「春の野」と聯關して、晩春の悠々たる自然を主題として教材とした。「ウシガナク」と「ヒバリガアガル」とは一聯の教材で、挿畫は

見開きになつてゐる。いはば晩春二題といふところである。兩者を一緒に取扱つても、又便宜上分けて取扱つても差支ない。

「ソラガハレタ」——春は何れかといへば、薄ぐもりにくもりがちであるが、既に晩春初夏の候となれば一般にかがやかしく晴れ渡る。日は悠々として長い。その悠々たる趣を、牛の聲と、雲雀の歌とであらしたものであるが、さういつた自然の高い趣を、兒童に直接に與へようとするものではない。兒童の好きな動物、殊にその好む鳴聲によつて、春の趣をそれとなく感ぜしめようとするものであり、挿畫もその趣をあらはしてゐる。かうした教材による自然の趣が、無心の兒童に潜んで、やがては「ものあはれ」をわきまへ得る日本人に育つて行くことを忘れてはならない。發音としては「ラ」「ナ」「モ」「ピ」「リ」が新しく提出される外に、鼻濁音としての「ガ」及びオ列の長音「モウ」、イ列の長音「ピイ」等、それぞれ指導上注意を要するものがある。

取扱の要點

先づ話合をさせる。自然の觀察一の「春の野」乃至「草花とり」の觀察と連繫し、體驗見聞と結んで挿畫(掛圖)を中心に話させる。牛を見たことがあるか、牛はどういつてなくか、雲雀を見たことがあるか、雲雀の聲を聞いたことがあるか、雲雀はどういつて鳴くか、畫中の牛は何をしてゐるか、ひばりはどこにゐるか、その外に何があるか、天氣はよいかどうか、天氣がよいと空はどうなるか、天氣のよい日、牛の聲を聞いたり、雲雀の聲を聞いたりするとどんな感じがするか、等に就いて適當に話させてから、文章を讀ませる。本課では「ラ」「レ」「リ」「ル」等のラ行音が多い。「シロ」「ハシレ」「ソロソロ」等と關聯し、兒童により地方によつて訛られがちなるラ行音を十分訓練する。

次に本教材で鼻濁音「ガ」が始めて出る。即ち「コトバノオケイコ」十四頁の挿畫によつて話合よつてはこの發音が中々困難である。コトバノオケイコ十四頁の挿畫によつて話合をさせる。そこには手拭をかぶつたおかあさんが掃除をしてをり、「リンゴ」「カゴ」があり、ダルマには「ヒゲ」がある。「テヌグヒ」「リンゴ」「カゴ」「ヒゲ」の「グ」「ゴ」「ゲ」は何れも鼻濁音であることに注意し、「ソラガ」「ウシガ」「ヒバリガ」の「ガ」とともに鼻濁音の指導をする。しかしこれは一回や二回の指導では何の効もないから、今後教材に即して常に鼻濁音に注意し練習させることが大切である。なほ「テヌグヒ」の「グヒ」は、重母音

「ウイ」を含んでゐるから、「アイ」「オイ」に聯關して指導すべきである。「モウ」は、「モ」の長音で「モー」と發音させる。コトバノオケイコ十四頁の挿畫におかあさんが持つてゐる「ハウキ(ホーキ)」と併せて、オ列の長音を練習させる。「ビイチク」の「ビイ」も長音「ビー」である。コトバノオケイコ十五頁の挿畫に就いて話させ、おもちゃの笛の音から「ビー」の音を練習する。本教材は發音指導が甚だ複雑であるから、「ウシ」と「ヒバリ」とは別々に取扱ふ方が便利であるかも知れぬ。

コトバノオケイコ十四頁・十五頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば全文を書かせる。

コトバノオケイコ十五頁に雲雀の畫をのせて、参考に供した。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 語中又は語尾のガ行音は鼻濁音(nga ngi ngu nge ngo)を以て標準とする。中國・四國・九州・沖繩及び新潟・群馬・埼玉・千葉・岐阜・愛知の一部は、鼻音で發しない地方であるが、少くとも鼻濁音が標準であることを認識させ、絶えずその練習をなさしめる。

「モウ」は文字に拘泥して「mou」と發音させてはならない。すべてオ列の長音はカナ

ヅカヒの如何に拘らず oi: であつて ou: でない。

「ヒバリ」は訛音の多いことばで、「ヒバル」「ヘバル」「フバリ」「シバリ」「ヒワリ」等いろいろであるから、矯正が大切である。

「テヌグヒ」の「グイ」は「ウイ」の重母音を含む。「テネグー」「テネゴー」などと「ウイ」の重母音は訛られがちであるから、これも注意を要する。その他地方により「ハレダ」「ナグ」「ビイチク」「テンマンデ」などの訛音を注意して矯正する。

文字 新字——ラ ナ モ ビ リ

語句語法 本教材に於いて始めて「何ガドウスル」といふ文型が出る。「ウシガナク」「ヒバリガアガル」がそれであり、「ソラガハレタ」はその完了形である。「アカイ、アカイ、アサヒ、アサヒ」「フクレタ、フクレタ、カミフウセン」等も、「アサヒガアカイ」「カミフウセンガフクレタ」といふ心持ではあるが、驚嘆的な心の激動が倒置的な表現を取り、助詞を挿む餘裕なからしめてゐる。しかもそれが感動的な兒童には寧ろ普通の表現なのである。

「ウシガナク、モウトナク」は「ウシガナク、ウシガモウトナク」を韻律的に制約した形であり、「ヒバリガアガル、テンマデアガル」もそれと同様である。

十三 ユフヤケ

教材の趣旨

「アカイアサヒ」に明けて、「ユフヤケ」に暮れてゆく春を思はせるやうな
 排列である。

晩春初夏の頃になると、そろそろ夕ばえが美しく、夕やけもしばしば
 見られよう。教材は傳統的に唱へられる夕やけの童謠で、もと關東地
 方に起り、今では殆ど全國にうたはれてゐる。自然教材ではあるが、大
 人の見る自然と違つて、頗る主體的に動的に表現されてゐるところに
 子どもらしい自然がある。美しい國土の自然に對し、かうした童謠を
 通して感激を深からしむべきである。

本教材では「ユフ」といふカナヅカヒが始めて出る。發音としては「ユ
 フ」は「ユー」であり、既修の「フウ」と同様ウ列の長音である。

取扱の要點

先づ挿畫(掛圖)を中心に、兒童の體驗に基づく話合をさせる。夕やけの美しいこと、夕
 やけが出ると大抵翌日は天氣であること、繪に八人の子どもがあること、向かふの空
 が赤くやけてゐること、子どもは歩きながらその方へ向かつて何かうたつてゐるら
 しいこと、等の話から文章へ導入する。

古來の童謠で、韻律はもちろん曲もある。ウタノホニーと連繫して、讀みの上にそれを
 あらはずやうにすべきである。

文字としては「ユフ」のカナヅカヒがある。コトバノオケイコ十六頁の例によつて、カナ
 ヅカヒを記憶するやうに指導する。同頁の繪は、夕焼夕方夕飯をあらはしたのであ
 る。

發音としては「ユフ」が長音「ユー」であること、「アシタ」を「アヒタ」に誤らぬこと、「ユーヤ
 ゲ」「テンギ」などに誤らぬこと等に注意して練習させる。

「ナアレ」は「ナレ」が韻律によつて延びたもので、「ナール」と長音に發音すべきであるが、
 曲の關係上「ナアレ」の「ア」が別に出るやうになりがちである。しかし「ナール」の氣持
 を失はないやうに讀ますことが大切である。

コトバノオケイコ十六頁によつて文字を正確に書かせ、なほ全文をも書かせる。
注意すべきことは文字語句語法等。

發音 「アシタ」の如く「タ」の上に来る「シ」は「ヒ」に訛られがちである。又地方により「テ
ンキニ」を「テンキネ」或は「テンキン」などと訛ることもある。何れも指導を要する。
「ニ」「キ」の音の不明瞭な地方では「イ」母音と關聯して矯正する。

文字 新字——ユ ヤ ケ キ ニ (ユフ) 以下括弧を附したものは、讀替
文字とみなして本欄に掲げた。

語句語法 「ユフヤケコヤケ」は「タイコバシコバシ」オホサムコサムなど童謠的な修
辭法で、「コヤケ」の「コ」に特に意味はないものと見てよろしい。

「ユフヤケコヤケ」は呼びかけの心持でなく、「ユフヤケコヤケダ」といふ意味の表現
である。「テンキニナアレ」は命令形で、希望意欲の發現である。

備考

ウタノホン「ユフヤケコヤケ」と連絡して取扱ふ。

十四 オツキサマ

教材の趣旨

夕やけが消えて夜のとぼりがおけると、月があらはれる。
歩きながら月を見ると、月は自分と共に動くやうに見える。子ども
にはそれが驚異である。「ワタシガアルク、オツキサマガアルク」は、さう
した子どもの驚異の心をあらはした教材である。「ユフヤケ」と同じく
頗る主體的な表現ではあるが、一方がはなやかで激動的であるのに對
し、これはぐつと落ちついてゐる。そこに「ユフヤケ」と「ツキ」との自ら
なる感じの相違が見られよう。又「ユフヤケ」が傳統的な歌謠であるに
對し、これは現代的個性的な詩である。

取扱の要點

月に就いて兒童の體驗と挿畫(掛圖)とを結んで話合をさせる。日が暮れると月が出
ること、月は三日月になつたり圓くなつたりすること、月の美しいこと、月を見ながら
歩くと月もついて歩くやうであることなど、話合をさせながら文章を讀ませる。
韻律的な文章であることに注意し、二拍子に讀めば「オツキ」「サマ」の各を一拍子に

読むことになり、ツキサマをややつめて読む。「ガ」が鼻濁音であることに注意する。「ワタシ」「オツキサマ」の「シ」「ツ」の發音にも注意する。「ツ」に就いては、コトバノオケイコ十七頁の挿畫によつて話をさせ（又は話をしてやる）「ツル」「キツネ」の語を拾ひ上げて發音練習を擴充する。

コトバノオケイコ十七頁によつて文字を正確に書かせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「ワタシ」を「ワタス」に近く訛り、「オツキサマ」を「オチキサマ」に誤る地方では十分に矯正する。何れも「イ」「ウ」の母音に關聯して正すことが大切である。「キ」の發音の曖昧なものも同様である。

文字 新字——ワツ

語句語法 「ワタシガアルクト、オツキサマモアルク」といつた心の表現であるが、文は頗る素朴である。「アルクト」といふ因果關係に考へず、「ワタシガ」「オツキサマモ」といつた主客的地位も考へないで、素朴に羅列した形であり、そこに自ら理知を抜去つたあどけなさがある。

「ワタシ」は「ワタクシ」の「ク」の脱落したもので、特に親しい場合に用ひられ、又目下の者を對手とする時に用ひられる。教科書では「ワタクシ」を標準とし、對話や韻文に於いては「ワタシ」を許容的に用ひる。

「オツキサマ」の「サマ」は「コマイヌサン」の「サン」と同様敬語であつて、「サン」は「サマ」の音便である。教科書では「サン」を標準とし、「サマ」は「神サマ」「お日サマ」「オツキサマ」等、一段高い敬語として、若しくは傳統的に固定した敬語として用ひる。

十五 オハヤウゴザイマス

教材の趣旨

朝起きてから學校へ行くまでの子どもの生活を主題とし、家庭に於ける挨拶のことばをとらへた教材である。

第一部の教材は、兒童の素朴な生活語を取上げてこれを韻律的に調べ、専ら誦詠的に讀ませることによつて、發音の基礎的練習をなさしめたのであるが、第二部に入ると、先づ兒童の生活——殊に言語生活の向

上に必要な躰のことばを與へてそれを身につけさせ、これを基礎としておもむろに教養ある國民としての標準語たる話しことばを修練せしめ、話しことばに基礎を有する文章の理解力と發表力を養はうとするのである。

第一部が終つて再び新しい朝が來たやうな教材の排列である。この教材以下四課は家庭及び學校に於ける兒童の生活として一聯の關係を持つ。挿畫(掛圖)の人物は次課に出る「ホンダイサム」である。

取扱の要點

朝起きてから家を出るまでの生活に就いて話合をさせる。朝起きて先づ何をするか、おとうさんやおかあさんにどう挨拶するか、御飯をいただく時にどういふか、學校へ行くため家を出る時何とあいさつするか、挿畫の子どもは何をしてゐるか、等に就いて話させる。これは修身の指導と餘程關係の深いことであるから、ヨイコドモで今まで學んだことと連絡をとりながら、話すやうにすることが大切である。右の話合の中から、「オハヤウゴザイマス」「イタダキマス」「イッテマキリマス」のことばを拾

ひ上げて、一通りそれを發音的に指導してから、教材を読ませる。

躰のことばであるから、發音を明瞭にしつかりと讀ませ、更にことばと作法とを結びつけて指導し修練せしめる。

コトバノオケイコ十八頁の に就いて、入れるべきことばを考へさせる。

先づことばで

オカアサン、オハヤウゴザイマス。

オヂイサン、オハヤウゴザイマス。

オバアサン、オハヤウゴザイマス。

センセイ、オハヤウゴザイマス。

オトウサン、イッテマキリマス。

オカアサン、イッテマキリマス。

など練習的にいはせ、なほ

ニイサン、オハヤウ。 ネエサン、オハヤウ。

など、相手を種々豫想させて練習的にいはせる。

コトバノオケイコ十九頁によつて文字を正確に書かせる。

なほ同書十八頁の「オハヤウ」「ゴザイマス」「マキリマス」によつて、カナヅカヒを指導する。「オハヤウ」は「ハイ」と比較して記憶の手がかりとし、「ゴザイマス」「マキリマス」は相対照して記憶させるやうにする。

コトバノオケイコ十八頁の [] に適當の文字を書入れさせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「オハヤウ」は「オハヨ」(オ列長音)と發音する。「ゴザイマス」の「ゴ」は鼻濁音ではない。「ザイ」は重母音「アイ」を含む。「イタダキマス」「イッテマキリマス」の如く語頭に來る「イ」は母音として明瞭に發音し、「エ」と誤る地方では特に矯正する。

「マキリマス」の「マキ」は「マイ」と發音する、重母音「アイ」を含んでゐる。「キ」を「ミ」と發音させてはならない。

文字 新字——ゴ タ キ (ヤウ イッテ)

語句語法 挨拶の語は固定的な語法が多いから、これを暗誦するまで指導し、動作と結んで身につけさせるとともに、敬語法の理解の手がかりとする。「オハヤウ」「イタダク」「マス」「ゴザイマス」「マキリマス」等の使ひ方に注意する。

備考

本課以降第十八課「サヤウナラ」までは、ヨイコドモ上「ガクカウ」「センセイ」「トモダチ」及びカズノホン(十五十六頁)と連絡して取扱に考慮する。

十六 ホンダイサムサン

教材の趣旨

朝の教室に於ける兒童の生活を主題とし、出席簿によつて自分の名を呼ばれるのに對して、「ハイ」と返事をする場面をとりあげて教材としたもので、これもことばの躰に關する教材である。既にこの頃になれば、入學以來日々の實踐によつて兒童も返事に馴れてゐるであらうが、それが文字にあらはされることによつて、新たな興味も起るであらうし、又これによつて或反省をなすであらう。出席を呼ばれて、ただかたの如く答へ得るばかりでなく、先生や兩親などに呼ばれた時、何時でも「ハイ」と答へ得るやうに指導し、實踐せしめることが大切である。本教

材にはホンダイサム以下四人の子どもの名が出てゐるが、この四人は結局ヨミカタはもちろん、ヨイコドモ・カズノホンを通じてしばしばあらはれる教科書中の主人公であつて、學習する兒童の心の友となり、兒童と共に學び、遊び、生ひ育つて行くのであつて、既に前課の挿畫の人物もこの課と連繋してホンダイサムになつてゐる。教材の發展に隨つてこの四人を中心として副的人物があらはれるやうになつてゐるが、それら副的人物は大體この四人の級友若しくは兄弟等である。

取扱の要點

先づ挿畫(掛圖)によつて話合をさせる。この四人の名を指摘させ、それらは何年生であるかを考へさせる。みんな仲のよいお友だちであること、前課の挿畫の子どもがこの中にゐること、今何をしてゐるところであるか、など話させ、學校の先生に呼ばれた時、すぐ何と回答するか、うちでおとうさんや、おかあさんに呼ばれた時どうするか、などに就いて反省させつつ話させて教材に導入する。先づ發音を正しく指導して讀ませる。

コトバノオケイコ二十頁によつて文字を正確に書かせる。

コトバノオケイコ二十頁によつて、「マサヲ」「ヨシヲ」「タケヲ」「フサヲ」等は(「男」「雄」「夫」の何れを問はず)カナヅカヒが「ヲ」であること、「ハルエ」「トシエ」「ユキエ」等は(「江」「枝」などは)「エ」であることに注意してカナヅカヒを指導する。(兒童の實際の名には、女の子に「トシエ」「ユキエ」などをそのまま戸籍名としてゐるものもあるから、立入つてそれらを指摘すべきではない)

コトバノオケイコ二十頁の に兒童自身の名をカタカナで書かせ、書けないものは特に指導してやる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「イサムサン」の「イ」は語頭の母音で、前課の「イタダキマス」などと關聯して明瞭に正しく指導する。「エ」と訛る地方は矯正を要する。「ハイ」は重母音「アイ」を含む。「ヲ」は「オ」と發音させ、「ow」^oと發音させてはならない。

文字 新字——ホ ム ベ ヲ ス エ

語句語法 「サン」——男の子を呼ぶのに學校では「タン」を用ひることが多いやうであるが、一般的な敬語「サン」を用ひて、あまりに實感に陥ることを避け、以て書中の主人

公たるにふさはしからしめた。
「ホンダイサムサン」といふ呼掛、「ハイ」といふ返事、何れも語法としては獨立の文である。

十七 エチカキマシタ

教材の趣旨

前課に聯繫して、教室に於ける兒童の生活を主題とした教材である。特に圖畫の作業を選んだのは、「エ」の文字を提出するためであるとともに、教室に於ける兒童の作業的創造的活動を重んじた意味がある。登場人物は前課をうけて四人とし、四人それぞれにすきな繪を描かせて、しかも國民精神を昂揚し、兒童の心情に適應する「ラッパ」「グンカン」「サクラ」「フジサン」に畫材を求め、なほ男女の特性に應ずることをも併せ考へてある。「ラッパ」はもちろん陸海軍に共通であるが、「グンカン」と對

照したところに、陸軍を象徴するものがある。もちろんかうした用意を悉く兒童に示すべきでなく、自ら感得させる程度に止めたい。文章の方からいふと、第一部の兒童自然の韻律的叫聲的言語を、第二部に入つての躑のことばと結んで、ここに始めて兒童生活の最も簡単な散文的表現に移つた。爾後低學年の散文は、日常の話しことばと最も密接な關係を持つ敬體口語文を以て建前とする。

取扱の要點

先づ挿畫(掛圖)に就いて話させる。この四枚の繪はそれぞれ何が書いてあるかをいはせ、「ラッパ」「グンカン」「サクラ」「フジサン」に就いて話をさせ、最後にこれらは誰が書いたのであらうかを考へさせてから文章に導入する。發音を正しく指導する。四つの「ガ」はいづれも鼻濁音であるが、「グンカン」の「グ」は鼻音を含まない濁音である。「エ」「ラ」は「エ」「オ」と發音させる。コトバノオケイコ二十二頁によつて、文字を正確に書かせる。コトバノオケイコ二十一頁によつて、カナヅカヒとして「エ」と「ラ」とに注意させる。コトバノオケイコ二十一頁によつて、數

例を比較しながら、カナヅカヒの理解と記憶とに導く。

コトバノオケイコニ十一頁の□にことばを入れさせる。ただ形式的に入れさせるのでなく、話合によつてホンダイサム以下四人の作業に、自分も亦加はるやうな氣持でことばを選ばせ、最後に記入させる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「ガ」行鼻濁音は、教材に即して常に指導と練習とを怠らないやうにする。

「エ」は「エ」^エ、「ラ」は「オ」^ラと發音させ、^エと發音させるくせをつけてはならない。地方によつて「エ」を「イエ」^エと發音するところがあり、「ラッバ」を「ダッバ」と訛るところが多い。何れも注意して矯正すべきである。

文字 新字——バ エ ヅ ジ

語句語法 「マシタ」——第十五課の「オハヤウゴザイマス」「イタダキマス」「イッテマキリ

マス」の現在形を受けて、「マシタ」の完了形が提出してある。

備考

エノホン一「グンカン」と關聯して取扱に考慮する。

十八 サヤウナラ・タダイマ

教材の趣旨

前課から更に展開して、歸校に際し先生に對してする挨拶及び家に歸つてする挨拶のことばを教材とする。

挿畫の人物は前課につながるハナコである。

第十六課及び第十七課に出た躰のことばの擴充である。これらは作法の精神及び動作と結合して指導し、それを實踐に導かなければならない。(家庭に於ける挨拶に就いては特に家庭と連絡して指導し、學校の教育を家庭でも實踐させるやうにすべきである。)

「タダイマ」といふ挨拶の相手を「オカアサン」としたのは、大體一年生の兒童が學校から歸つた時、父親は不在と見るべきであるからである。

第十六課以降家庭と學校に於ける兒童の生活を主題として發展し

來つた教材は、一先づここで終結する。

取扱の要點

學校から歸る時、先生にどうごあいさつをするか、家へ歸つた時おとうさんやおかあさんや、その他に對してどういふごあいさつをするか、挿畫の子どもはだれであらうか、それは今何をしてゐるか、等に就いて話合をさせ、挨拶語を拾ひあげて、これに伴ふ作法を實行させてから、文章に導入する。

發音を正しく讀ませる。「センセイ」「オハヤウ」など、發音の指導に注意すべきものがある。

コトバノオケイコ二十三頁によつて文字を正確に書かせる。

なほコトバノオケイコ二十三頁によつて、「サヤウナラ」のカナヅカヒに注意させ、又夜ねる前におとうさんやおかあさんなどにどういふごあいさつをするかに就いて話合をさせつつ、「オヤスマイナサイ」を指導して挨拶のことばを擴充する。□の中に適當なことばを入れさせるがよい。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「センセイ」の「セ」を「シエ」と發音する地方では矯正が大切である。「セイ」は「セー」

と發音させる。

「サヤウナラ」は「サヨーナラ」と發音させ、「サイナラ」といはないやうに注意する。

「タダイマ」を「タライマ」などと誤らぬ注意も大切である。

「オトウサン」「オカアサン」は「オトーサン」「オカーサン」と發音させる。

語句語法 「サヤウナラ」を標準とし、話しことばとしては「サヨナラ」を許容する。又家を出かける時に「タダイマ」といふ地方もあるから、「イッテマキリマス」と「タダイマ」を區別して適正に使用するやう指導すべきである。

(以上 五月)

十九 ヒカウキ

教材の趣旨

飛行機が編隊をつくつて、爆音すさまじく飛んでくる。雲一つない晴れた紺碧の空だ。たちまちにしてあらはれたたちまちに飛び去つてしまふ飛行機の速さ、勇ましさ、美しさ——思はず叫んだことばをとらへて、韻律的に調べたのがこの教材である。

初めに「ヒカウキ、ヒカウキ」とくりかへしてあるのは、天の一角にあらはれた飛行機を発見した歡喜の聲であり、「アライソラニ、ギンノツバサ」は、まさに頭上を轟々と渡りつつある勇姿に對する驚嘆の叫びであり、最後の「ヒカウキ、ハヤイナ」は、みるみる遠く去りゆく姿を追ひながら、名残惜しげに見送つてゐることばなのである。児童が魂を全く飛行機にうばはれて、大空を見あげてゐる姿は、この韻文のかげにおの

づから見える。教材に即しつゝ飛行機に関する話をなし、子どもにふさはしい國防觀念を養ふべきである。挿畫は、重爆撃機の九機編隊が、悠然と飛翔してゐる圖である。

取扱の要點

飛行機は、児童にとつてもつとも興味のあるもので、すでに種々な知識をもつてゐるから、挿畫(掛圖)によつて話をさせる。ひととほり飛行機に就いて児童の觀念を整理し、挿畫の情景を話させて、文章に導入する。

發音を正しく讀ませる。韻文であるから、韻律や感情を生かしながら、すなほに何度もくりかへして讀ませる。

コトバノオケイコ二十五頁によつて、文字を正確に書かせる。時間に餘裕があれば全文を書かせる。

コトバノオケイコ二十四頁「アライソラ、アライウミ」によつて、カナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ二十四頁の「トビガキマス。ツバサヲヒロゲテトンデキマス。タ

カイソラヲトンドキマス。」を讀ませて、「ツバサ」の語を具體的に會得させるとともに、本教材の文章を理會させる手がかりとする。

コトバノオケイコ二十四頁の繪を、クレヨンで塗らせ、詩の情景の理會に資する。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「ヒカウキ」―ヒコーキ 「アライ」―アオイ 「オイ」の重母音を練習させる。「ハヤイナ」で「アイ」の重母音を練習させる。「ギン」の「ギ」は鼻濁音ではない。

文字 新字――キ(カウ)

語句語法 「アライソラニ」の「ニ」の使ひ方は、やや程度の高いものであるが、さうしたことに拘泥せず、直觀的に讀みとらせる。

「ヒカウキ、ヒカウキ」は、呼びかけではなく、「飛行機が来た、あるひは「飛行機だ」といふ緊迫した表現である。

「ヒカウキ」と第一句をきり、「ギンノツバサ」と第二句をきり、おしまひに「ハヤイナ」と詠嘆したところに、飛行機の速さが階段的に表現されてゐる。

二十 オツカヒ

教材の趣旨

親しいをぢさんのところへのお使ひは楽しいものである。をぢさん、をばさんの家へ行つて、「よく来たね」と迎へられ、やさしい心からなるもてなしを受けることは、子どもにとつては、何よりも嬉しいことである。が、その楽しいお使ひにも、往々途中の不安や億劫がつきまとうことがある。そこで、「シロモ、ヨロコンデツイテ行く必要がある。本教材は第十五課乃至第十八課の發展であつて、勇が學校から歸つて、又は日曜日にお使ひに行くところである。文章の方からいへば第十七課の「ホンダサンガ、ラッパノエヲカキマシタ」といふ最も簡単な散文から進んで、「イサムサンガ、チヂサンノトコロヘオツカヒニイキマス」、「シロモ、ヨロコンデツイテイキマス」の如く、やや複雑な文章に展開してゐる。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心とし、兒童の體驗と結んで話合をさせる。お使ひに行つたことがあるか、誰の所へおつかひに行つたか、誰といつしよに行つたか、寒い時であつたか、暖い時であつたか、どんな道を通つて行つたか、をちさん・をばさんがいらつしやるか、おちいさん・おばあさんがいらつしやるか、をちさん・をばさん・おちいさん・おばあさんのところへお使ひに行くといつて迎へてくださるか、などの間によつて話させ、文章に導入する。

句讀點段落に氣づかせながら、發音を正しく讀ませ、文字語句を指導し、次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコニ二十六頁の

オトウサン オカアサン オヂイサン オバアサン

ヲヂサン ヲバサン

オツカヒ オコヅカヒ コヅカヒサン

ヤマヘイキマス ノハラヘイキマス ウミヘイキマス

等によつて、「オ」と「ヲ」、「ヒ」、「ヘ」のカナヅカヒを練習させ、「オコヅカヒ」「コヅカヒサン」の

「ヅ」が「ズ」にあらざることを知らしめるとともに、語彙を擴充する。

コトバノオケイコニ二十七頁・二十八頁によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば全文を書かせる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「イサムサンガ」の「ガ」が鼻濁音であること、「オツカヒ」の「カヒ」、「ツイテ」の「ツイ」が重母音を含むことに留意して指導する。

「ヲヂサン」—— オヂサン 「トコロヘ」—— トコロエ 「オツカヒ」—— オツカイ

「イサムサン」を「イサムサー」「エサムサン」、「ヲヂサン」を「オヂサー」「オツサン」、「トコロヘ」を「トコロサ」「トコレー」、「オツカヒ」を「オツケー」「オツキヤー」、「シロ」を「ヒロ」「イ

ロ」等と訛らないやうにさせる。

文字 新字——ヂ (へ ヒ)

語句語法 「ヲヂサンノトコロヘ」の如き補語、「ヨロコンデ」の如き修飾語が始めて出たので、文がやや複雑になつてゐる。

二十一 デンワアソビ・オキヤクアソビ

教材の趣旨

子どもの生活は、大部分が遊びである。ものを作つたり、花や虫などを取つたりして遊び、動物といつしよに遊びもするが、また一面、電話遊び、お客遊び、お醫者遊び、郵便遊び、兵隊遊び、學校遊び等の如き模倣遊戯をも好んでする。

本教材は、かかる兒童の模倣遊戯をとりあげて、電話遊びとお客遊びの二つの場面に仕立てた。この兒童の遊戯生活を通して、興味を覚えさせながら自然に、挨拶や躰のことばを兒童の身につけさせようと意圖したのである。即ち無邪氣に電話遊びをしたり、お客遊びをしたりしてゐる間に、電話特有の名乗合がわかつたり、自然に敬語が使へるやうになつたり、返事の仕方がわかつたり、訪問の際の相互の挨拶ができ

るやうになつたりするのである。さうして、いくら丁寧なことばを取りかはしても、それが模倣遊戯である以上、少しも不自然に感じられな

いで、知らず識らずのうちに躰のことばが會得されるのである。最初の電話遊びでは、ハナコがキヌコに電話をかけて、ハルエが來てゐるから遊びに來るやうに誘ふのである。この呼び出しに應じて、キヌコがお客になつてハナコとハルエのところへ來たのが後半のお客遊びである。勿論最初から、ハナコもハルエもキヌコも同じ場所に居るのではあるが、距離をへだてて電話をかけたなり、訪問したりするつもりでしてゐるので、決して遠方に離れてゐるのではない。その點にあ

くまでも遊びの境地がある。全體が對話のみによつて書かれてあるから、話しことばが直接讀みの對象となつてゐる。かうした對話形式は、「コマイヌサン」、「ホンダイサムサン」に、その萌芽があり、本教材に至つて始めて完全なものとなつたのである。對話に鈎が附けてないが、活字の組み方によつて、對話者

の區別がはつきりつくやうにしてある。

取扱の要點

先づ電話に就いて話合をさせる。電話はどんなものか、どんな風にして使用するか、電話で話す時にはどんなことばで話すか、電話遊びをしたことがあるか、など話させ、次にお客様に就いて話合をさせる。お客様に行つたことがあるか、その時どう挨拶したか、おうちにお客様がいらつしやつた時どう挨拶するか、など兒童の體驗を話させた後、挿畫(オキヤク、アツビ)の掛圖を中心に話合をさせ、文章に導入する。一通り讀ませてから、對話が誰のことばであるかに就いて話合をさせる。

發音を正し、できるだけ對話の調子を読みの上にあらはすやうに指導する。繰り返して讀ませて暗誦させ、兒童を指名して實際にやらせてみるべきである。

コトバノオケイコ二十九頁によつて、「ゴ」のカナヅカヒに注意させ、 の中に適當に名前を記入させる。

コトバノオケイコ二十九頁の

ハイ、サウデス。

イイエ、サウデハアリマセン。

ドウゾ、コチラへ。

オシキクダサイ。

を讀ませ、これらのことばを使ふ場合に就いて話合をさせ、疑のことばを擴充する。

コトバノオケイコ三十頁によつて、「アリガタイ」「オメデタイ」の「タイ」と比較して、「アリガタウ」「オメデタウ」のカナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ三十頁三十一頁によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に書寫又は書取をさせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「ハルエサンガ」「アリガタウ」「オアガリクダサイ」の「ガ」「スグ」の「グ」が鼻濁音、「ゴメンクダサイ」の「ゴ」が濁音であること、「クダサイ」の「サイ」が重母音を含むことに留意して指導する。

「サウデス」——ソーデス 「ワタクシハ」——ワタクシワ 「アリガタウ」——アリガトー

「マキリマス」——マイリマス 「ドウゾ」——ドーズ

「モシモシ」「ワタクシ」の「シ」を「ス」と訛らないやうにする。また「キヌコサン」「キテイラツシャイマス」の「キ」が訛り易いから注意させる。「アナタ」を「アンタ」、「イラツシャ

「イ」を「イラッサイ」「イラッシエー」、「マセンカ」を「マシエンカ」、「スグ」を「シグ」と訛らな
いやうにする。

文字 新字——ビ ド ソ (サウ ハ シャ タウ)

語句語法 「モシモシ」は呼びかけの語で、電話では常に用ひられる。

本課に於いて、「キヌコサンデスカ」「ハイ、サウデス」「ワタクシハハナコデス」のやう
な、「何が何だ」といふ文型が出てゐる。随つて「デス」の用法に注意する。又「ゴメン
クダサイ」「オアガリクダサイ」の「クダサイ」の用法を理解させるやうに指導する。
「イラッシヤイマス」は、元來「来る」の敬語で、動詞的な用ひ、方と助動詞的な用ひ方と
二つあるが、「ハルエサンガキタイラッシヤイマス」の場合は、「キマス」の敬語として
用ひられ、「ヨクイラッシヤイマシタ」の場合は、「ヨクキマシタ」の意味に用ひられて
ゐる。「アリガタウ」は「アリガタウゴザイマス」の意である。

備考

本課以降二十四「キヲツケ」までは、「ヨイコドモ上」「トモダチ」「ゲンキヨク」と關聯して、取
扱に考慮する。

二十二 シリトリ

教材の趣旨

前課の發展として、しりとり遊びの遊戯を教材とする。ハナコ、キヌ
コ、ハルエが、この遊びをしてゐるものとして扱へば、一層興味が深いで
あらう。

一人が初めに「ペンキ」といひだす。するとそのことばの最後の音を
取つて、次の子どもが「キツネ」といふ。次の子どもは同じやうにして「ネ
コ」といふ。かうして順々にことばをうけ渡したり、うけ取つたりして
ことばを連絡させていつて遊ぶのであるが、だんだんうけ取る音がむ
づかしくなり、ことばが少くなつていく。本教材でも、「タンポポ」から
「ポンプ」と來て、次の人は、ゆきづまつたのである。しかし、この次をい
はないと負けになるといふので、困つたあげく「アカアカドンドン」といふ

樂隊の音をもちだした。これは擬聲音であるが、困つた時の一案として子どもらしいおとしであつて、それにおのづから笑ひが伴なつてゐる。教材は清音「ネ」を提出し、半濁音「ペ」「ポ」「プ」を提出するために構成されたものであり、本教材に至つて、カタカナ清音、半濁音は全部提出されたわけである。

しりとり遊びは、ことばの音によるつながりを遊びのきつかけとする。これによつて子どもたちは、自らことばの發音に注意することにもなれば、自分の語彙をふりかへる機會が與へられることにもなるから、或程度これを教育的に利用することが可能である。

取扱の要點

しりとり遊びに就いて話合をさせ、教材に導入する。教材は文ではなく、單語の羅列であるから、つづけて朗讀させずに、一語一語はつきりと、あたかもしりとり遊びをしてゐるやうに讀ませる。さらに兒童から兒童へ、一語一語讀みわたすやうに讀ませることも大切である。

コトバノオケイコ三十二頁の繪によつて、しりとり遊びをさせる。スズメ、メダカ、カヤ、ヤマ、マナイタ、タヌキ、キシヤ、シヤツ、ツクエ、エハガキ、キツブの順序である。なほこのしりとりとヨミカタの教材のしりとりとを組合はせてみるのもよい。また初めのことばを黑板に書いておいて、これに續くしりとりを考へさせ、それを兒童のめいめいの筆記帳に書かせて、讀ませてみるのもよからう。

コトバノオケイコ三十二頁によつて文字を正確に書く練習をさせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「キツ、ネ」を「キチネ」「ケツネ」といはないやうに注意する。

文字 新字——ペ、ネ、ブ、ポ、プ

語句語法 文字面からみれば、ただ單語の羅列であるが、この裏に、首尾の音がつながつてゐること、これをとほして子どもが遊んでゐることを考へさせるがよい。

二十三 カクレンボ

教材の趣旨

カクレンボの遊びは、全国の児童に共通した遊びである。その遊び方や遊びに伴なふ韻律的なことは、地方的に多少の相違はあらうが、本教材は大體東京地方に於いて行はれるものを取りあげた。

「カクレンボスルモノ、ヨットイデ」といひつつカクレンボの仲間をよび集める。集つたら鬼をきめるために「ジャンケンポンヨ、アヒコデシヨ」と呼びながら、ジャンケンをする。鬼がきまると、鬼は目をつむつて、「モウイイカイ」といつて、仲間がかくれてしまふまで待つてゐる。かくれ場所をさがす子どもたちは、「マアダダヨ」といひながら、急いでかくれようとする。鬼は又「モウイイカイ」をくりかへす。まだかくれおほせない場合には、「マアダダヨ」をくりかへす。かくれてしまつた後、鬼が、「モウイイカイ」といふと、かくれた子どもが「モウイイヨ」といふ。そこで鬼がさがしに行くことになる。

實際の遊びの場合には、これらのことは一種の旋律に乗せられて何べんもくりかへされるものであり、児童には十分親しまれてゐるも

のである。かうした遊びのことは拾ひあげて、ことばの音聲的練習をなすのが、本教材の目的である。

取扱の要點

文章挿畫(掛圖)を中心にして、児童の體驗と結んで話をさせる。この際カクレンボの遊びにも、地方的にいろいろの條件があるであらうから、その地方に行はれる遊びをもととして話をさせ、文章に導入する。

發音を正しく指導して讀ませる。なほコトバノオケイコ三十三頁の「ミンナデ、カクレンボシテキマス」以下の文を讀ませ、挿畫(掛圖)と聯關させて、「ワタクシ(ハナコ)とイサムとハルエとマサヲがカクレンボ遊びをしてゐること、鬼をきめるためにジャンケンをし、ハナコが鬼になり、他の子どもがかくれることなどの話をさせ、児童自身が畫中の子どもと一體となる心持で、本教材の文章を何べんも讀ませる。

コトバノオケイコ三十三頁によつて文字を正確に書かせ、なほ時間に餘裕があれば書寫又は書取をさせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「カクレンボ」とか、「ジャンケンポン」とかには、地方によつて種々變つたことばが

ある。教材のことばを標準として取扱ふ。「イイ」が「エイ」「エー」などとならないやうに注意する。「アヒコ」―「アイコ」モウ」―「モー」マアダダヨ」―「マーダダヨ」。

文字 新字――ホ (ジャシヨ)

語法 「ヨットイデ」は「ヨツテオイデ」が韻文的制約によつてつまつたものであり「アヒコデシヨ」は地方によつては「アイコデサイ」などいひ、「シヨ」「サイ」は掛聲と思はれる。「イイカイ」は「イイカ」の意味である。

備考

ウタノホン上「カクレンボ」と連絡して取扱ふ。

二十四 キヲツケ

教材の趣旨

いろいろな遊びをしたが、おしまひに男の子どもたちは兵隊ごつこをやる。一人の子どもが指揮官になつて號令をかける。ほかの子どもは、その號令によつて動作をする。初めに「キヲツケ」といふと、並んで

ゐる子どもたちは「キヲツケ」の姿勢をする。次に「ミギヘナラヘ」と號令をかける。みんなは右にならつてならぶ。それを見て「ナホレ」をかける。次に「バンガウ」といふと、子どもたちは、「一、二、三、四、五、六」と元氣よく番號をとる。この番號によつて並んでゐる子どもたちは、六人ゐることがわかる。六番目の子どもの次に白い犬もすわつてゐる。軍用犬のつもりであらう。犬も「ワン」と番號をいひたげにしてゐる。

教材は號令であるから、簡單明瞭に發音させねばならない。大きな聲で發音を練習するには、恰好の教材である。しかもその號令(ことば)が、ただちに動作行爲を伴ふものであるから生きたことばの練習ができる。さきに挨拶や躰のことばによつて、ことばづかひは丁寧にかに話すべきことを練習したのであるが、ここでは元氣にはつきりといふべきことを教へねばならない。しかしこれも模倣遊戯としての兵隊ごつこであることに注意し、一年生の體鍊科の實際としひてあはせる必要はない。

この教材に於いて始めて數漢字を提出する。兒童の自然に即したことばとして教材化したことに苦心がある。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心として、兒童の體驗と結んで話合をさせ、教材に導入する。文章は號令であるから、發音に注意するとともに元氣にはつきりと讀ませ、兒童を指名して、實際にやらせる。

コトバノオケイコ三十四頁によつて、文字を正確に書かせ、なほ適當に書寫又は書取をさせる。同頁の「マヘヘススメ」以下を讀ませて、發音練習をさせるとともに語彙を擴充し、同頁の「一ツニツ三ツ……」によつて、「一二三……」の讀替として數の唱へ方を練習させる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「ミギ」の「ギ」、「バンガウ」の「ガウ」は鼻濁音であり、「五」の「ゴ」は鼻濁音ではない。「ミギヘナラヘ」は、「ミギエナラエ」と發音し、ナラヘに「アエ」の重母音がふくまれてゐる。「バンガウ」は「バンゴト」、「ナホレ」は「ナオレ」と發音する。「ナオレ」には重母音「アオ」が含まれてゐる。「キヲツケ」は、「キヲチケ」とならないやうに注意する。

「一二三四」の發音は、卷頭のラジオ體操の掛聲と同じやうに、正しく練習させる。

文字 新字——^一ニ^二三^三四^四五^五六^六 (ホ ガウ)

語句語法 「キヲツケ」は命令文であり、「バンガウ」も「番號をかけよ」の意味、「一二」も「一番」であります。「一番であります」といふ意味であつて、すべて文的表現である。

二十五 アメガヤミマシタ

教材の趣旨

季節と結んだ教材である。

六月の梅雨の晴れ間に、涼しい風が吹き木の葉がそよそよとゆらぐ。雨後の爽快な自然が教材の主題であるが、どこまでも子どもの感動の表出に即してできた文章である。故に本教材は、客觀的な叙景描寫を外部から兒童に與へようとするものではなく、爽やかな雨後の自然が、子どもの心に映じて、それからうける感動を獨言の形で表出したもの

とみるべきである。但しその場合、「アカイアサヒ」「ウシガナク」等よりは感動が静的であり、客観的叙述もかういふところから次第に發展してゆくものと考へられる。

梅雨のない地方では、單に雨上り後の場合としても差支ない。

又次の「イケニフネ」と不即不離の關係に於いて聯關させ、その課を出して行く準備としての効果をも同時に擧げて居り、後の「ユフダチ」「ニジ」とも一脈の連絡を持つものである。

挿畫(掛圖)は便宜上次の課と一體にあらはしてある。

取扱の要點

雨上りのことに就いて話合をさせる。梅雨は、じめじめした餘り心持のよいものではないが、梅雨の晴れ間に太陽を見た時は嬉しいこと、雨あがりの後には、何處からか涼しい風が吹いて來たり、虹が出たりして氣持がよいこと、そよそよと吹く風にゆられて木の葉がそよそよ動くのは、何ともいへないよい氣持であること、等の話合をして、文章へ導入する。

發音を正し、段落に氣づかせ、文字語句を指導して次第に讀みを確實にする。

この課では「木」の字が新出文字であるからコトバノオケイコ三十五頁「木ノハ」「マツノ木」「木ノエダ」等によつて、語彙を擴張するとともに、「木」の字を確實に習得させる。又「ソヨソヨ」のことばに關聯して、「ザワザワ」「ヒラヒラ」等の副詞を、例へば「木ノハガザワザワウゴイテキマス」とか、「テフガヒラヒラトンデキマス」などといはせて、これらのことばを會得せしめる。更に、

スズシイ

アタタカイ

ツメタイ

によつて、の部分に、例へば、「カゼ」の語を當てて、「スズシイカゼ」「アタタカイカゼ」「ツメタイカゼ」などといはせたり、「カゼ」「ゴハン」「ミヅ」等のことばを當てて、「スズシイカゼ」「アタタカイゴハン」「ツメタイミヅ」といふやうにいろいろいはせ、最後に適當に記入させる。その際「カイ」「タイ」の重母音に注意して、正しく發音させることも忘れてはならない。コトバノオケイコ三十五頁によつて文字を正確に書かせ、なほ時間に餘裕があれば、書寫又は書取をさせる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「アメガ」の「ガ」、「カゼガ」の「ガ」、「木ノハガ」の「ガ」、「ウゴイテ」の「ゴ」等は鼻濁音で、「ウゴク」を「イゴク」、「イノク」等と訛る地方では矯正する。又「スズシイ」は訛り易い語であり、「カゼ」は「カジエ」、「カデ」等と訛る地方がある。「木ノハ」の「ハ」を、近畿地方では「ハ」
と長音に發音する。いづれも矯正が肝要である。

文字 新字——ゼ、木

語句語法 「スズシイ」、「ソヨソヨ」の形容詞・副詞の使用に注意させる。「フイテキマス」と「ウゴイテキマス」の「キマス」と「キマス」との相違にも氣づかせる。

備考

自然の觀察「雨あがり」と連絡して取扱に考慮する。

二十六 イケニフネ

教材の趣旨

本教材は前課の發展であり、不可分の關係を持つが、必ずしも雨上りに、舟を浮かべたといふことにしなくともよい。

きれいな水がいつばいにたまつてゐる池に、舟を浮かべて遊ぶ。その舟は、この子どもたちがこしらへたものであらう。やうやくでき上つた舟を池におろすと、うまく水に浮かぶ。浮かんだことだけでも嬉しいのだが、それが風をうけてそろそろ動きだした。だんだん速さをまして走つていく。これを見て子どもたちは、愉快でたまらない。この歡喜を表現したのが本教材である。

四面海にかこまれてゐるわが國に於いては、國防的見地からいつても、少年時代から海に親しませることが大切である。しかも海にかこまれた國土とはいへ、兒童の中には、まだ海を見たことのないものが甚だ多い。それで、池に舟を浮かべるといふ遊びをとほして、おもむろに海のことを想像させ、興味をもたせ、やがて、ヨミカタ一の「トビトカメ」や、ヨミカタ二の「山ノ上」などの教材によつて海洋へのあこがれを喚起し

ながら、次第に海洋のことを知らしめるやうになつてゐる。

教材は四つの單文からなつてゐるが、第一節は子どもの動作を示した完了形であり、その他は眼前の情態であるので現在形を用ひ、舟の動きをあらはしてゐる。

取扱の要點

挿畫(掛圖)によつて兒童の體驗を話させ、文章に導入する。

發音を正しく讀ませ、文字語句を指導し、次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコ三十六頁の間によつて答へさせる。

コトバノオケイコ三十六頁「ミヅノ上」「ヤマノ上」によつて、語彙を擴張するとともに「上」の字を確實に習得させる。

コトバノオケイコ三十六頁の「ヨチヨチ ソロソロ ズンズン」の語を使つて短かい文をいはせる。例へば「アヒルガヨチヨチハシル」「ソロソロオイデ」「ズンズンアルク」等の類である。

コトバノオケイコ三十七頁によつて、文字を正確に書かせ、なほ適當に書寫又は書取をさせる。

コトバノオケイコ三十六頁の繪によつて、舟に就いて自由に話合をさせる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「ホガアリマス」の「ガ」は鼻濁音である。「ミヅ」は「ミズ」と發音する。「ホ」を「ホー」

と長音に訛る地方では矯正する。「カゼ」を「カジエ」、「ミヅ」を「ミジ」、「ズンズン」を「ジンジン」等と訛るのも同様である。

文字 新字——ツ^上

語句語法等 「イケニ、フネヲウカベマシタ」は「ワタクシタチガフネヲウカベマシタ」といふ意味であり、「カゼヲウケテ、ハシリマス」は「フネガカゼヲウケテハシリマス」の意味である。

二十七 ホタル

教材の趣旨

六月の夕方の空に飛び交ふ螢は、子どももの好むもので、螢狩は全國の兒童の夏の生活にはなくてはならないものである。笹を手に兄弟や友

だちとうちつれ、水邊の草叢に螢の姿を求め、児童の口をついて流れ出るものは、「ホウホウ、ホタルコイ」の歌であらう。この歌はいろいろな形式で、殆ど全国に歌はれ、懐しい郷土的なかをりと旋律を伴なつてゐるが、かうした郷土的な章句と韻律を生かして、新しい童謡に仕立てたのが本教材である。

「ホウホウ、ホタルコイ」は螢に呼びかけ、螢を招く子ども心ながらな表現であり、螢の淡い光を「小サナチャウチン」と見たてて、それをさげて来いといふのである。このやうに、螢を擬人化し、螢を親しい友だちとして呼びかけ、夏の夜空に降るやうにまたたいてゐる星と考へ合はせて、「ホシノカズホド」たくさん、「トンドコイ」と、子どもらしい希望を四句二聯の童謡にあらはしたものである。さうして、この「ホシノカズホド」トンドコイ」の餘韻は、直ちに次の「タナバタ」の課に連絡するやうになつてゐる。

藝能科ウタノホン上と結んで本教材の理解を深くすることが肝要

である。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心に、児童の體驗と結んで話合をさせる。螢を取りに行つたことがあるか、誰と行つて幾匹取つたか、空には星が光つてゐたか、螢を取る時どんな歌を歌ふか、螢の光は何に似てゐるか等話させて、コトバノオケイコ三十八頁の文を讀ませ、今までの話合を整理してから、「ヨミカタ」の文章へ導入する。發音を正し、文字語句を指導するとともに、韻律を生かして、讀みを確實にする。

コトバノオケイコ三十八頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、全文を書かせる。

コトバノオケイコ三十八頁の「小サナイヌ」「小サナトリ」「小サナハナ」を讀ませ、又は書かせて、「小」の字の習得を確實にする。

なほコトバノオケイコ三十八頁の挿畫は、螢の理解に資する。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「ホウ」は「ホー」、「チャウチン」は「チョーチン」と發音する。「サゲテコイ」の「ゲ」は鼻濁音、「コイ」は重母音を含む。「ホタル」を「ホータル」、「ホータロ」などと訛つたり、「小サ

ナ」を「チッチャナ」「チッコイ」等といはないやうに導く。

「サゲテ」のアクセントは、「サゲテ」(携持する)、「サゲテ」(下におろす)の二つの場合がある。ここでは「サゲテ」である。

文字 新字——小^ササナ ゲ (チャウ)

語句語法 「ホウホウ」は呼び聲であり、「チャウチンサゲテコイ」は、散文ならば「チャウチンヲサゲテコイ」とあるべきである。

備考

ウタノホン上「ホタルコイ」と連絡して取扱ふ。

(以上六月)

二十八 タナバタ

教材の趣旨

前課の発展である。七夕祭は子どもたちにとつては、年中行事中、楽しいなつかしいものである。その夜子どもたちの目は、遠くはるかな

天上の星へ向けられる。星はみんなふだんよりも光つてゐるやうに見える。お祭のせむか笑つてゐるやうにさへ見える。地上の子どもたちは「タナバタノアマノ川」などとかいた短冊や、切紙などをかざつた竹又は柳などを立てて、お祭をする。教材はこのときの子どもの心持を主體的にあらはした韻文である。五五の韻律は、かうした兒童の感情を素材に結晶させてゐる。「タナバタノアマノ川」は、短冊に書く文句であるが、それを生かして七夕の夜の天の川の美しさを歌つたのである。この天の川をはさんで、たくさん星が光つてゐる。それがにこにこ笑つてゐるといつた氣持で、この際「オホシサマ」をあへて牽牛と織女の二星に限るものと考へさせる必要はない。

「ピカピカ」「ニコニコ」の副詞は、星の様子を無邪氣に具體化し、「オホシサマ」と二度くりかへしてゐるところに兒童の喜びがあふれてゐる。かうした氣持によつて、自然に親しませ、日本的なこの季節的行事の喜びを感得させる。

取扱の要點

挿畫を中心とし、児童の體驗と結んで話合をさせ、文章に導入する。

發音を正し、韻律を生かして讀みを指導し、くりかへし讀ませて讀みを確實にする。

コトバノオケイコ三十九頁によつて、文字を正確に書かせ、なほ全文を書寫させる。

コトバノオケイコ三十九頁の挿畫に色を塗らせ、文字を書かせて、作業的に取扱ふ。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「アマノ川」の「ガ」は鼻濁音である。

「オホシサマ」を「オホスサマ」といつたり、「オホシシヤマ」などと訛らないやうに注意する。

文字 新字——アマノ川

語句語法 三句とも名詞どめになつてゐる。「タナバタノアマノ川」は「七夕の夜の天の川の美しさよ」の意味、「ピカピカトオホシサマ」は「びかびかとお星さまが光つていらつしやる」の意味、「ニコニコトオホシサマ」は、「にこにことお星さまが笑つていらつしやる」の意味で、いづれも文的表現である。

この詩が明かるくほがらかにひびくのは、開口音の「ア」及び「オ」母音が多くふくま

れてゐるからである。

備考

カスノホン一二十一頁と連絡して取扱に考慮する。

二十九 ハコニハ

教材の趣旨

兄弟仲よく箱庭を作る。最初土を高くして山を作り、山に木を植ゑ、苔を付け、山の傍に川を作つて石や橋を並べ、段々と箱庭を作つて行く。工程の進むにつれて、漸次箱庭の形ができ上つて行くのは楽しみである。その楽しさの中に児童を浸らせながら、形無きところから形あるものを作り出して行く工夫創造の喜びに感動させようとするのである。本教材は、児童の作業生活をそのまま寫したもので、作業生活の一つの指針となると同時に、それを報告する報告文の一例とも見られ、隨

つて兒童の綴り方への關聯を示唆する。又この主題は、地理的教材としての意義を多分に持つもので、山川橋等を關係的に把握させると同時に、素朴な模型圖を作ることもなるのである。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心とし、兒童の體驗と結んで話合をさせる。箱庭を作つたことがあるか、どんな箱庭を作つたか、誰と作つたか、等の問答をして、體驗を呼び醒し箱庭作りの情景を心の中に思ひ浮かべさせながら、文章に導入する。

發音を正し、文字語句を指導して讀みを確實にする。比較的長文であるから、段落句讀點に留意させ、なほ話合によつて全文を要約させながら讀ませる。

コトバノオケイコ四十頁の

ハコニハヲツクリマシタ。

山ヲツクリマシタ。

川モツクリマシタ。

オヂイサンニミタイタダキマシタ。

を讀ませて、それが本教材の要約であることに氣づかせる。

コトバノオケイコ四十頁の

ハコニハニハトリニハイシ

ウエ木ハチウエタウエ

小サナ川川ノミヅアマノ川

等によつて、「ニハ」「ウエ」のカナヅカヒを練習させ、「川」の字の習得を確實にするとともに、語彙の擴充をする。

「小サイ」の「サイ」は重母音を含んである。

コトバノオケイコ四十一頁によつて文字を正確に書かせ、なほ時間に餘裕があれば適當に書取をさせる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「ニイサン」「ツチ」「オヂイサン」の方言は全國いろいろあるから注意して指導する。「ハコニハ」を「ハゴエツリ」「ツクリ」を「チクリ」「ツグリ」「ツチ」を「ツズ」又は「チチ」

「小サイ」を「ツサエ」「チツチヤイ」「チツコイ」「フチ」を「フツ」又は「フズ」「イシ」を「エス」又は「エシ」「ハシ」を「ハス」等と訛らないやうに注意する。なほ「デキテ」を「デケテ」といはないやうにする。

「ハシ」のアクセントは、「ハシ」が橋、「ハシ」が箸、「ハシ」が端であることを注意して指導する。

文字 新字——山ヤマ本ホン

語句語法 「スツカリデキテカラ」の「カラ」の使ひ方を例によつて會得させる。

オヂイサンニミテイタダキマシタ

ホメテクダサイマシタ

の「イタダキマシタ」「クダサイマシタ」の敬語に注意する。

「ホホウ、コレハヨクデキタネ」——對話が地の文に挿入された場合の書きあらはし方に就いて注意させる。

三十 ココハドコノホソミチダ

教材の趣旨

地方地方に傳誦される童謡はいろいろあつて、子どもたちは、それを歌ひながら楽しく育つていく。歌のひびき調子ことば意味などがし

らずしらずの間に子どももの心にしみこんで、日本の子どもらしい感情を養ふのである。

この教材は、歌が對話の形で構成されてゐる。即ち一人の子どもが、「ココハ、ドコノホソミチダ」と歌でたづねる。するとほかの子どもは、「テンジンサマノホソミチダ」と歌で答へる。そこで「ドウゾ、トホシテクダサイナ」とたのむ。「ヨウノナイモノ、トホシマセン」とことわる。おしまひに、「テンジンサマヘマキリマス」といつてたのむ。「ソレナラ、トホシテアゲマセウ」とやつと許されて、そこをとほりぬけることができるのである。

この歌には、これに伴なふ遊戯があつて、よく日暮の町かどや、あき地等で行はれてゐる。この歌詞は、地方によつていろいろ方言的に歌はれてゐるが、本教材はできるだけ標準語に近くした。

遊びの中におのづから敬神の心がこもつてゐることに注意すべきであり、この精神は、次の「オミヤノ石ダン」に發展する。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心に、兒童の體驗と結んで話合をさせる。どんな歌を歌ひながら遊ぶか、その遊び方はどんな風にするか、等の話合をして、文章に導入する。

發音を正し、文字語句を指導し、韻文であるから韻律を生かすやうに讀ませ、次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコ四十二頁「アゲマセウ アゲマセン」イキマセウ イキマセン」によつて、カナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ四十二頁によつて、文字を正確に書かせ、なほ全文を書寫させる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「アゲマセウ」の「ゲ」は鼻濁音。「ドウゾ」は「ドーズ」、「トホシテ」は「トーシテ」、「ヨウノナイモノ」は「ヨーノナイモノ」、「マキリマス」は「マイリマス」、「アゲマセウ」は「アゲマシヨ」と發音する。

「テンジンサマ」を「テンジンシヤマ」、「ヨウノナイモノ」を「ヨウノネーモノ」、「クダサイ」を「クダセー」、「ソレナラ」を「ソんなラ」、「ソレダバ」と訛る地方では、矯正する。

文字 新字——(セウ)

語句語法

「ココハ、ドコノホソミチダ

テンジンサマノホソミチダ」

のやうに敬語のないことばから始つて、「ドウゾ、トホシテクダサイナ」以下のやうに敬語的な表現に移つてゐるが、これはむしろ子どもらしいおもむきがあらはれてゐるものと見るべきである。

三十一 オミヤノ石ダン

教材の趣旨

「ハトコイ」「コマイヌサン」に出發した敬神教材は、「ココハ、ドコノホソミチダ」の韻文を経て、本課に至つて、更に一層の發展を示してゐる。お宮の石段を一二三と數へて登つて行つて、神前で、私たちが元氣で暮すことができるのも、神様のお蔭だといふ氣持で拜禮する場面を、前後二

聯の韻文の形式であらはし、神前に於ける二拜二拍手一拜の禮法も生動的にあらはしてある。特に文字の點からは、「キヲツケ」の課の延長として、七から十までの新字が極めて自然に提出されてある。カズノホンに於いては、六月に既に十を超える數の數へ方を教へてゐるから、「二十五ダン」の「二十五」の數も、兒童にとつては無理ではなからう。「二十五ダン」の「五」と、「ゴシンゼン」の「ゴ」とが同じ韻であり、「ニドオジギシテ、手ヲウツテ、モーツウツテ、オジギシテ」は、「二拜二拍手一拜を意味し、「ワタクシタチハゲンキデス」は、神様のお蔭で私たちはこんなに元氣でありますといふ意味である。本課は前課と關聯させ、不即不離の關係に於いて指導すべきである。挿畫は、お宮の石段を圖案化して示したものである。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心に、兒童の體驗と結んで話合をさせる。又「ハトコイ」「コマイヌサン」の課と關聯させて問答をする。お宮にお参りすると鳩がある、そのほかに鳥居もあるし、コマイヌもある。コマイヌはどんな様子をしてゐるか、お宮へお参りする時には石段をのぼつて行く、石段を數へて登るのは面白いものだが、誰か數へた者はないか、お参りしたら、神前でどうして拜むか、みんなどんな氣持で拜むか、等の問答をして文章に導入する。なほコトバノオケイコ四十三頁の「マサヲサントハチマンサマヘオマキリシマシタ」から「カミサマノマヘデヲガミマシタ」までを讀ませて、話合の整理をなすとともに、この韻文の背景を與へておくがよからう。

韻文であることに注意し、發音を正しく明瞭に、韻律的に朗讀させ、文字語句を指導することによつて讀みを確實にする。

石段の數へ方は、「一二三、四五六七、八九十」と數へるが、「モーツ」の「一ツ」を手がかりとし、又コトバノオケイコ四十三頁と連絡して、「一ツ、二ツ、三ツ、四ツ、五ツ、六ツ、七ツ、八ツ、九ツ、十」といふ數へ方を練習させ、十一以上は「十一、十二、十三、十四……」であることに氣づかせる。

コトバノオケイコ四十四頁によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば全文をも書かせる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「二十五」の「ゴ」、「ゴシンゼン」の「ゴ」、「ゲンキ」の「ゲ」等は純然たる濁音であるが、「オジギ」の「ギ」は鼻濁音であることに注意する。「十」「二十五」の「十」を「ジ」又は「ズ」、「手」を「テ」と發音しないやうに注意する。

文字 新字——石^シ 七^シ 八^ハ 九^ク 十^ジ(ジュー) 手^テ

語句 韻文であるから、散文と違つて表現が集約されてゐる。「二十五ダンデゴシンゼン」は、二十五段登つたらそれで石段が終つて、神前に出たといふ意味であり、「ワタクシタチハゲンキデス」は、「お蔭様で」といふ氣持を言外に持つのである。

三十二 アサガホ

教材の趣旨

おとうさんが心をこめて育てた朝顔が、始めて花を咲かせた朝の情景である。咲いた朝顔の花を見つけたおとうさんが、思はず「アサガホガサイタヨ」と誰にいふともなく大きな聲でいふ。それを聞きつけた「ボク」が、すぐそこへ行つて見ると、鉢植の朝顔が二つ咲いてゐる。紫

色の大きな花である。何ときれいなみづみづしい花であらう。「ボク」はその美しさに見とれてゐたが、「さうだ、これを寫生をしてみよう」と思ひついて、畫用紙とクレヨンを持つて來て、濡縁に腰かけた。かき始めてゐると、ラジオがひびいてくる。ピヤノの曲だ。

教材はこのすがすがしい夏の情景を表現し、自然への關心を深めるとともに、また家庭の温情にひたらせる。なほ本教材はヨイコドモの「ナツヤスミ」と關聯して取扱ひ、あはせて綴り方の練習に資する。

取扱の要點

挿畫を中心に、兒童の體驗や、朝顔の花に就いて話をさせる。朝顔の花はいつ咲くか、朝顔の花の色にはどんなものがあるか、寫生をしたことがあるか、何を寫生したか、等の話をさせて、文章に導入する。

發音を正し、文字語句を指導して次第に讀みを確實にする。

コトバナオケイコ四十五頁によつて [] の中に適當なことはを記入させて讀ませる。

コトバノオケイコ四十六頁の「アサガホ ユフガホ ワタクシノカホ」によつて、「カホ」のカナヅカヒに注意させる。

また「大キナハタ 小サナハタ」によつて、「大」と「小」とを對照して、語彙の擴張をはかるとともに、「大」の字の習得を確實にする。

コトバノオケイコ四十六頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に書寫又は書取をさせる。

注意すべきことは、文字 語句語法等

發音 「オトウサンガ」「アサガホガ」「ビヤノガ」の「ガ」は、何れも鼻濁音である。

「オトウサン」——オト—サン 「アサガホ」——アサガオ 「ハチウエ」——ハチウ

エ 「大キナ」——オーキナ 「シヤセイ」——シヤセ—

「二ツ」を「フタチ」「ヒターチ」と訛らないやうに指導する。

「オトウサン」には、いろいろな方言がある。「オト—サン」を標準として指導するところが大切である。

「花」は「ハナ」、端は「ハナ」、鼻は「ハナ」のアクセントに注意して指導する。

文字 新字——大^{おほ}キナ

語句語法 「オツシャイマシタ」は、「イヒマシタ」の敬語である。

「イツテミルト」は「ボクガイツテミルト」の意味である。

「大キナハナデス」と現在形になつてゐるのは、實感を強調したものである。

「アサガホガサイタヨ」といふやうに、對話が地の文に挿入された場合の書きあらはし方に就いて注意する。

備考

本課以下「ハナツミ」まではヨイコドモ上「ナツヤスミ」と連絡して取扱ふ。

三十三 オハカノサウヂ

教材の趣旨

お盆には、佛壇を飾つたり、お墓をきれいに掃除したり、香花や供物をしたりして、先祖の靈をまつる。それは全国的に行はれる年中行事で、この行事を通して、兒童に崇祖の精神を體得させるのが本教材の目的

である。ただかうした年中行事が、地方によつて或は陽暦で行はれ、或は陰暦で行はれるので、教材とすることに悩みはあるが、併しその精神を生かして末節に拘泥しない心構が大切であり、指導上地方的に生かすことが大切であらう。

教材は、姉と自分が、母についてお墓の掃除に行つたことの生活記録であるから、児童には主題表現ともに親しみ易く、随つて児童の綴り方に直接關聯を持ち得るものである。

お墓の掃除をすることは、祖先を大切にする精神のあらはれであるが、お墓のそばに祖父の好きな萩の花が植ゑてあり、その萩の根もとに水をかけてやる母の心は、崇祖の精神を最もよく具體化したものである。随つて、

「ハギハ、オヂイサンノオスキナ花デシタヨ。」

ト、オカアサンガオツシヤツテ、ソノネモトニ、水ヲオカケニナリマシタ。

は、本教材の頂點として、非常に感銘的であることに注意すべきである。なほこの教材では、作者が一年生であり、ねえさんは三年生ぐらゐと見てよからう。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心に、児童の體驗と結んで話合をさせる。お盆になるとどんなことをするか、お墓の掃除に行つたことがあるか、誰と行つたか、等の話合をして、文章に導入する。

發音を正し、地の文と對話とを意識して讀ませ、文字語句を指導して讀みを確實にする。なほ話合によつて文章を要約させながら、コトバナオケイコ四十七頁

オハカノマハリノ草ヲトリマシタ。

オハカノ石ヲ水デアラヒマシタ。

オハカノソバニハギガアリマシタ。

の文章を讀ませ、それが本教材の要約であることに氣づかせる。又これを手がかりとし、教材に即して話させるのもよい。

コトバナオケイコ四十七頁の

オトウサンノオスキナ花ハ、デス。

以下のの中に花の名を記入させ、語彙の擴張をなす。

コトバノオケイコ四十八頁によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に書取をさせる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「オカアサンガ」「アカイ花ガ」の「ガ」、「ハギ」の「ギ」は、共に鼻濁音である。「サウヂ」は「ソージ」、「マハリ」は「マワリ」と發音し、「マーリ」とならないやうにする。「ツイテ」の「ツイ」、「アカイ」の「カイ」、「サイテ」の「サイ」は重母音を含むことに注意する。又「ニツ三ツ」と熟した場合の「三ツ」は「ミツ」と發音する。「イキマセウ」が、「イギマシヨ」と濁音にならないやうに注意する。

文字 新字——草 水 花

語句語法 「ネエサントフタリデ」は、「ネエサントワタクシトフタリデ」の意味で、國語特有の言ひ方であることに注意する。

「オハカノマハリノ草ヲトツタリ、オハカノ石ヲ水デアラッタリシマシタ」の「タリ」の用法に留意する。

「ハギハ、アカイ花ガニツ三ツサイテキマシタ」の如き、「何は何が」の形は、國語固有のもので、例へば「象は鼻が長い」「今日は天氣がよい」「私はごはんがたべたい」などと形式を一にするものである。

次の諸例によつて、敬語の用ひ方に注意させる。

オカアサンガオツシヤイマシタ。

オカアサンガイヒマシタ。

オスキナ花デシタ。

スキナ花デシタ。

水ヲオカケニナリマシタ。

水ヲカケマシタ。

三十四 花ツミ

教材の趣旨

前課にひきつづいての季節教材であり、姉と妹が、近くの野原に出か

けて花つみをする生活の表現で、「ワタクシタチ」のワタクシは一年生、妹は五つぐらゐと見るべきである。これも綴り方と關聯を持ち得る。

二人が草の中を歩いてゐると、初めにナデシコの花を見つけた。それからまたさがして行くと、今度はヲミナヘシの花が咲いてゐた。松の木かげには、紫のキキウの花が咲いてゐた。花つみの興味は漸層的に高まる。妹がキキウの蕾をそつと指先でつまんでみた。まるでやはらかい、ふくらんだ蕾は、いかにもかはいらしいので「カハイラシイネ」と姉にささやく。ここにこの教材の感動の頂點があるとともに、児童の生活に對する指導性がある。即ち子どもは、かうした場合、蕾をつみ取るであらう。ただつまんで「カハイラシイネ」とささやくだけで、つみ取らないところに自然に對する愛撫の心があらはれてをり、そこに指導性があることに注意すべきである。最後の「ワタクシタチハ、手ニモチキレナイホドツンデ、ウチヘカヘリマシタ」は、結局この文の餘韻である。

教材は、花つみの楽しさを味ははせ、女の子どもらしいやさしさを感じさせ、特に日本的な草花としてのナデシコ・キキウ・ヲミナヘシなどをとほして、國土の自然への愛着を持たせようとするのである。本教材にあらはれる植物は、ナデシコ・ヲミナヘシ・キキウの三つであるが、さきに、アサガホがあり、ハギがあり、後にススキも登場して、卷一の自然風景を飾つてゐる。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心として、児童の體驗と結んで話をさせる。花つみに行つたことがあるか、誰と花つみにいつたか、どんな花をつんで來たか、花の色はどんな色であつたか、等の話をさせてから、文章に導入する。

發音を正し、花つみのたのしさを心に描きつつ讀ませ、文字語句を指導して次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコ四十九頁の文章を讀ませて、それが本教材の要約であることに氣づかせる。また逆にこれを手がかりとして、教材に即して話をさせてみるのもよいで

あらう。

コトバノオケイコ五十頁の

ノハラヘイキマシタ

ウチヘカヘリマシタ

花ヲミツケマシタ

花ヲツミマシタ

カハイラシイネ

カハイイコトリ

アカチャンヲカハイガツテヤリマス。

によつて、カナヅカヒに注意させる。

「松ノ木ヲ五本ウエマシタ」と「カハイラシイ草花モウエマシタ」とによつて、「松」と「草花」の文字を習得させ、語彙の擴張をはかる。

コトバノオケイコ五十一頁によつて、文字を正確に書かせ、なほ時間に餘裕があれば、適當に書寫又は書取をさせる。

コトバノオケイコ四十九頁の繪に、それぞれ色を塗らせて作業的に取扱ひ、花の理會に

資する。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「カゲ」の「ゲ」は、鼻濁音。

「イモウト」——イモート 「ヲミナヘシ」——オミナエシ 「キキヤウ」——キキョー 「カ

ハイラシイ」——カワイラシイ 「イセマシタ」——イーマシタ

「ツレテ」を「チレテ」、「ツミニ」を「チミニ」、「ウチヘ」を「ウチサ」、「カヘリマシタ」を「ケーリマシタ」と訛らないやうに注意して指導する。

文字 新字——松マツ（キヤウ）

語句語法

「ナデシコノ花ヲミツケマシタ。」

「ヲミナヘシノ花ヲミツケマシタ。」

「キキヤウノ花モサイテキマシタ。」

によつて、「モ」の用法に注意させる。

最初に「ノハラヘ花ヲツミニイキマシタ」と書き、終りに「ウチヘカヘリマシタ」と結んだ首尾一貫せる文章構成に留意して指導する。

各文の主格は「ワタクシ」又は「ワタクシタチ」であるが、それを掲げないところに、むしろ國語固有の表現がある。

三十五 ユフダチ

教材の趣旨

暑さにあへぐ夏の日、ざあつと降つて来る夕立は、降り方が勇壯であるばかりでなく、必ず雨後の爽快さを伴ふから、大人にとつても子どもにとつても喜ばれる人氣者である。もつとも、夕立には雷が付きもので、児童の中には夕立を餘り好まない者がゐるかも知れない。しかし雷をこはがらないで、平氣でおかあさんの手傳をして、雨戸を閉める強い子どもであるやうに仕向けて行かなければならない。

この教材は、夕立の光景を子どもらしい感じで叙し、夕立の降る前の空や木の様子から、大粒の雨が落ちて来て雷が鳴り、ざあつと篠突くや

うな大雨となる過程が描かれてある。その夕立を背景にして、おかあさんと子どもが、あわただしく戸を閉めるのであるが、そこにも子どもの心がはたらいてゐる。しかも總てのものがあわただしく動いて、瞬時瞬間急速に情景が變化してゐる。その點を、次の夕立後の様子と比較しながら読み取らすことが大切である。

取扱の要點

挿畫を中心に、児童の體驗と結んで話をさせる。夕立が降つて来た時のこと、明かるかつた空が急に暗くなること、どこからともなく風が吹いて来ること、木の葉がゆれること、大つぶの雨が二つ三つぼつぼつ降つて来ること、雷がなること、夕立が降つて来た時、どんなことをしたか、等話をさせて文章に導入する。發音を正し、文字語句を指導し、讀みを確實にする。特に文の持つ爽快なしかもあわただしい感じを讀みによつて會得するやうに指導する。

本教材には、「ザワザワ」「ピカリ」「ゴロゴロ」「ザアッ」等の擬聲語が多く用ひられてをり、それらがこの文を具體的にしてゐるから、これらのことばを指導することが大切で

ある。

コトバノオケイコ五十二頁によつて の中に適當なことはを入れ、まとまつた文を作らせる。例へば、

カゼガ、ザワザワ トオトラタテマシタ。

ガミナリガ、ゴロゴロ トナリマシタ。

トケイガ、カチカチ トナツテキマス。

アメガ、ザアツ トフツテキマシタ。

ユキガ、チラチラ トフツテキマシタ。

木ノハガ、バラバラ トオチテキマシタ。

の類で、兒童にある程度工夫させて記入させるがよい。

コトバノオケイコ五十三頁によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、書取をさせる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「クモガ」「ヒロガリマシタ」「木ノハガ」「雨が」「カミナリガ」等の「ガ」は鼻濁音であり、「ゴロゴロ」の「ゴ」は濁音である。「空イッパイ」を「エッパイ」と訛らないやうに注意する。

「クモ」のアクセントは、雲、蜘蛛いづれも「クモ」で、「アメ」は雨が「アメ」、飴が「アメ」である。
文字 新字——空、雨

語句語法 次の二つを比較して敬語の用ひ方に注意させる。

オカアサンハ、イソイデアマドヲオシメニナリマシタ。
ワタクシハ、オカアサントイツシヨニアマドヲシメマシタ。

三十六 ニ ジ

教材の趣旨

「ユフダチ」から「ニジ」に發展する。勢よく降つてゐた夕立が、からりと晴れ、あたりが明かるくなつて、日がきらきらとさして来る。蟬が嬉しさうに鳴きだす。ふと向かふの空を見あげると大きなニジが半圓形になつてかかつてゐる。さつきのものすごい夕立にくらべて、これは

また何とはれやかな美しい風景であらう。子どもが「オカアサン、ニジガデマシタヨ。キテゴランナサイ」と大きな聲で呼ぶ。おかあさんはすぐ出てきて、「マア、キレイナニジダコト」といひながら子どもといつしよにしばらく空の虹に見とれる。自然も人生も子どもものの心に即して嬉しさで満ちみちた表現である。

前課とあはせて自然現象の端倪すべからざる変化と、限りなき自然の美と、これを背景として活躍する母子の情愛とを感得させるべきである。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心として、兒童の體驗と結んで話合をさせる。ニジを見たことがあるか、ニジはどんな時にあらはれるか、ニジはどんな形をしてゐるか、どんな色をしてゐるか、ニジを見てどんな氣持がするか、等の話をさせて文章に導入する。發音を正し、雨後の氣持のよさやニジの美しさを感じさせつつ讀ませ、文字語句を指導して次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコ五十四頁の

ユフダチガヤミマシタ。大キナニジガデマシタ。オカアサンガ、「キレイナニジダコト。」トオツシャイマシタ。

を讀ませて、それが本教材の要約であることに氣づかせる。またこれを手がかりとして教材に即して話合をさせるのもよい。

コトバノオケイコ五十四頁の「ユフダチ ユフガタ ユフヤケ ユフハン」「ムカフノ空 ムカフノ山」によつて、カナヅカヒに注意させる。

また「大雨」アヲ空 アサ日 ユフ日」によつて、「雨」「空」「日」などの文字を習得せしめ、語彙の擴張をはかる。

コトバノオケイコ五十五頁の文を讀ませて、「ウレシサウ」「タノシサウ」「オモシロサウ」などの副詞句の使ひ方を知らせ、カナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ五十五頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、適當に書寫又は書取をさせる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「ユフダチガ」の「ガ」、「アタリガ」の「ガ」、「日ガ」の「ガ」、「セミガ」の「ガ」、「ニジガ」の「ガ」は、み

な鼻濁音である。

「ユフダチ」——「ユーダチ」——「ウレシサウ」——「ウレシソー」——「ムカフ」——「ムコー」——「マア」——「マー」——「キレイ」——「キレー」

「アカルク」を「アカルー」と訛らないやうに注意して指導する。

「ニジ」の訛音と方言が多い。注意して指導すべきである。

「ヒ(日)ガ」は「ヒガ」であり、「ヒ(火)ガ」は「ヒガ」である。アクセントに注意する。

文字 新字——日。(カフ)

語句語法 「セミガ、ウレシサウニナキダシマシタ」は擬人的な表現である。

「マア、キレイナニジダコト」の「マア」「コト」は、いづれも感動をあらはすことばである。

「オッシャイマシタ」は、敬語であることに注意させる。

三十七 ア リ

教材の趣旨

夏はアリの最も活潑に働く時である。自分の體よりも大きな獲物を運ぶアリを見てみると、どこからあれ程の力が出るかと不思議に思はれる。たくさんのアリが協力して食糧を運搬する有様を見ると、この小さい生物が、戮心協力の生ける標本とさへ思はれる。自然の観察一では、六月に「麥畠と虫とり」の中でアリを取扱ふことになつてゐるが、それを受けて、児童の體驗を生かしながら取扱ふことができるであらう。教材は七七を基調とする動的な韻律を持つてをり、主體的擬人的に表現されてゐる。特に「アリガナランデ、セッセトトホル」は、「セッセトイソガシサウニトホル」といふ意味で、この句は三度くりかへされて、この詩全體に統一感を與へてゐる。この「セッセ」と働くアリの一心不乱な表情が、次の「マジメナカホシテ」であつて、「マジメナカホ」の「カホ」は、アリ全體の表情と見るべきである。かうした擬人的な表現は漸層的に高まり、次の「ヤ、コンニチハ」「コンニチハ」の對話を導き出し、更に「オジギシテ」といふ人間らしい動作にまで及ぶのである。

取扱の要點

挿畫を中心に、兒童の體驗と結んで話合をさせる。アリは暑い日でもよく働くこと、アリに就いて自然の觀察でならつたこと、アリが行列を作つて通ることに就いて話合をさせ、文章へ導入する。

發音を正し、韻律を生かして讀ませ、文字語句を指導して讀みを確實にする。

コトバノオケイコ五十六頁の

アリガナランデトホリマス。

イソガシサウエトホリマス。

タクサン、タクサントホリマス。

「ヤ、コンニチハ。」

「コンニチハ。」

アイサツヲシテトホリマス。

を讀ませ、本教材の理解に資し、又話合の手がかりとする。

コトバノオケイコ五十六頁の

ミチノヒダリガハラトホリマセウ。

を讀ませて話合をさせ、左側を通行すべきことを考へさせ、實行させるやうに指導する。

コトバノオケイコ五十六頁の

デアフ。
デアヒマス

の例によつて、「デアフ」「デアヒ」のカナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ五十七頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば全文を書かせる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「アリガ」の「ガ」、「オジギ」の「ギ」はともに鼻濁音である。「アツイ」の「ツイ」は重母音を含んでをり、「アチー」等と訛るのを矯正する。「アリ」の「リ」を明瞭に發音しない地方では注意して指導する。又「デアフ」は「デアウ」で、「デオー」といはないやうにする。「アツイ」(暑)は「アツイ」であり、「アツイ」(厚)は「アツイ」である。アクセントに注意する。

文字 讀替——小ミチ (チヨ)

語句語法 「カホシテ」「オジギシテ」は、「カホラシテ」「オジギラシテ」といふ場合も多いが、

「カホスル」「オジギスル」は複合したサ行變格の動詞と見るべきである。

備考

自然の觀察一「麥鳥と虫とり」と連絡して取扱に考慮する。

(以上七月)

三十八 川アソビ

教材の趣旨

前課では蟻の行列を眺めた。本課では池をほつて水をたたへ、魚をとつてその池にはなし、魚の形や動きなどをつぶさに見る生活に發展する。人物は勇と正男の二人である。初めに川の砂をほつた。すると下から水が湧いてくるので、二人は喜びながら池をつくつた。池の水は初めはにごつてゐるが、しばらくするとすんできれいになる。そこで魚をとらうといふことになる。正男が「メダカヲ二ヒキ」とる。勇も負けずに「エビトドヂャウ」をとる。二人は魚を池の中にはなす。ど

んな形をしてゐるか、どんなにして泳ぐか、ここに子どもの自然の觀察がある。メダカは小さいが、いかにも元氣ものらしくすいと泳ぐ。ドヂャウはものぐさで、ときどきによりりと動く。エビははしこく、透明で、時に見失ふことがある。かうした自然に對する子どもらしい感興から、子どもの科學が導き出されるのであるが、ヨミカタ教材として注意すべきは、それが生活の表現であり、ことにその小さい動物の特徴をとらへた文章であることである。即ちどこまでも國語の教材であつて、自然の觀察への契機にはなるが、自然の觀察そのものではないことに注意して取扱はなければならぬ。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心とし、兒童の體驗と結んで話合をさせる。川遊びをしたことがあるか、何をして遊んだか、どのやうにして魚をとつたか、どんな魚がとれたか、その魚をどうしたかななどの話をさせて、文章に導入する。

發音を正し、川遊びの楽しさを心に描かせながら讀ませ、文字語句を指導して、次第に

読みを確實にする。

コトバノオケイコ五十八頁の「イサムサントマサヲサンガイケヲツクリマシタ。ソレカラ、サカナヲトリマシタ。ソノサカナヲイケニハナシマシタ」を讀ませて、それが、本教材の要約であることに氣づかせる。

コトバノオケイコ五十八頁の

「ハジメハ水ガニゴツテキマシタガ、ダンドンキレイニスンデイキマシタ。」

以下の文を讀ませて、生々した文のあらはし方に注意させる。

コトバノオケイコ五十九頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に書寫、又は書取をさせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「水ガ」の「ガ」、「ニゴツテ」の「ゴ」、「サガシマシタ」の「ガ」、「オヨギマス」の「ギ」、「キマシタ」の「キ」、「メダカガ」の「ガ」は鼻濁音。「ゲンキ」の「ゲ」は鼻濁音ではない。

「キレイ」——キレイ「入レヨウヨ」——イレヨヨ「ソコノハウ」——ソコノホー

「スキトホツテ」——スキトトツテ「ドチャウ」——ドジョー

「ニヒキ」を、「ニシキ」、「ドチャウ」を、「ドンジョー」、「エビ」を、「イビ」、「見エマス」を、「メーマス」、「イ

クウチニ」を、「イグウチニ」などと訛る地方では、注意して矯正する。

文字 新字——下 出テ 入レヨウ 目ダマ 見エマス (チャウ ハウ ニヨ)

語句語法

「サカナヲトツテ入レヨウヨ」の「ヨ」は、感動の助詞であるが、ここでは、さそひかける意味を強めてゐる。

「メダカガニヒキトレタ」「ボクハ、エビトドチャウヲトツタ」——前者は受身的語法で、可能の意味をあらはし、後者は能動的な語法である。この二者で正男、勇のそれぞれの性情があらはれてゐることに留意する。

備考

ヨイコドモ上「ナツヤスミ、エノホン」「オサカナ」「水アソビ、カズノホン」二十七頁と連絡して取扱に考慮する。

三十九 メダカサン

教材の趣旨

前課で、メダカとエビとドヂャウを取つて観察した兒童の眼を、更にくさん集つてゐるメダカの群に導き、童心に映るまゝを表現する韻文を教材とした。メダカがたくさん集つてゐる有様を、「オホゼイヨツテナンノサウダン」と見、それが何かに驚いて、ぱつと四散する様子を、「ワットニゲテツタ」と感じたのである。そこには、メダカ即子ども、子ども即メダカの境地がある。「メダカ、メダカ」といはないで、「メダカサン、メダカサン」としたしきをもつて呼びかけてゐることと相俟つて、いかにも子どもらしい心情が表出されてゐる。

この教材は、自由詩であるが、最初の「メダカサン」の反復が韻律を呼びおこし、その韻律が全體を支配してゐることに注意すべきである。

取扱の要點

挿畫を中心として話合をさせる。メダカは群をなして泳いでゐること、人が足音をさせたり、影がさしたりすると、パット四方へ散つてしまふことなどを、兒童の體驗と結んで話合をさせ、文章に導入する。

韻文であるから、發音を正し韻律を生かして讀ませ、話合と相俟つて讀み確實にする。

適當に全文を書寫させる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「ミンナガ」の「ガ」、「ニゲテ」の「ゲ」は鼻濁音である。「オホゼイ」は「オーゼー」、「サウダン」は「ソーダン」と發音する。

「メダカ」の方言は非常に多いから「メダカ」を標準として指導する。「オホゼイ」を「オーゼー」と訛らないやうに注意する。

「ワット」は、元來叫びの擬聲から來た副詞であつて、「ワットニゲル」といへば、「ワットサケビナガラニゲル」ことである。蟻に「ヤ、コンニチハ」といはせたと同様、擬人的なあらはし方である。「ニゲテツタ」は、元來「ニゲテイツタ」とあるべきであるが、韻文的制約によつて許容的に用ひた。

備考

前課の發展として取扱に考慮する。

四十 トビトカメ

教材の趣旨

本教材から第三部にはいる。第一部では、もりあがつてくる児童の素朴單純なことばをとらへて教材化し、第二部では挨拶や躰のことばを身につけさせながら子どもの生活を表現し、第三部では、童話及び童話化した教材によつて長文の讀解力を養ひ、併せて空想の世界を豊かにする。

本教材は、トビとカメが海に就いて話しあふ現代的な童話である。一羽のトビが天空高く飛んでゐる。それを見つけた池のカメが、好奇の眼を輝かしながらトビにたづねる。「あの山の向かふに何があるか」とたづねたがるこの頃の児童のあこがれが、カメによつてあらはされてゐるとも見られる。トビはさすがに高く飛びまはつてゐるだけに

廣い世界を見てゐる。カメはいはゆる井戸の蛙で、「ゴノイケヨリヒロイノデスカ」の間に對して、トビもちよつと答へやうがなかつたが、「ドウシテドウシテ」と否定しながら、「空ノヤウニヒロイ」と教へた。トビはそれでもものたりないので海の歌をうたつた。

教材には寓意も諷刺もないが、結局児童に感銘さすべきものは海である。四面環海のが國であるが、全國のこの期の児童で海を見てゐるものは意外に少ないであらう。しかも海國日本の意識を高揚して國防に目ざめしめることは、頗る緊要である。

「イケニフネ」の教材を出發點として、海への憧憬をさらに一步進めたのが、この教材であることに留意すべきである。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心として、トビのこと、カメのこと、ウミのことなどに就いて、児童の知つてゐることを話させる。トビのとんでゐるところを見たことがあるか、トビはなんといつて鳴くか、カメを見たことがあるか、どこに住んでゐるか、カメに就いて何

かお話を知つてゐないか、ウミに就いて何か知つてゐることはないか、等の話合をさせてから、文章に導入する。發音を正し、韻文は韻律を讀みの上に生かし、文字語句を指導して、次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコ六十頁の

ムカフノ空ニニジガ出マシタ

ウミノムカフカラフネガクル

センセイサヤウナラ

空ノヤウニヒロイノデス

トビガ空ヲトシテキマス

イケニカメガキマシタ

によつて、カナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ六十頁の

マサヲサンガトビニナリマシタ。

ハナコサンガカメニナリマシタ。

フタリハオハナシラシマシタ。

ドンナオハナシラシタデセウ。

を讀ませ、それに就いて話合をさせてから、教材の對話の部分の部分を劇的に話させる。

コトバノオケイコ六十一頁によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、適當に書寫又は書取をさせる。

注意すべきことは文字語句語法等

發音 「トビガ」の「ガ」、「カメガ」の「ガ」、「ナニガ」の「ガ」、「ウミガ」の「ガ」、「フネガ」の「ガ」は鼻濁音。

「ドウシテ」——「ドーシテ」「カウイッテ」——「コーイッテ」「ムカフ」——「ムコー」「ビイヒ

ヨロロ」——「ビーヒヨロロ」「日本」——「ニッポン

「トビ」を「トンビ」、「カメ」を「ガメ」などと訛る地方では注意をして指導する。

「海」は「ウミ」、「鷹」は「ウミ」、「龜」は「カメ」、「瓶」は「カメ」のアクセントに注意して指導する。

文字 讀替——日本ニッポン（ヒヨ）

語句語法 「ヒロイヒロイ」「ドウシテドウシテ」は、何れもことばの反復によつて語勢を強めたものである。

「カウイッテカラ」の「カラ」は、トビの前のことばをうける。
 「ビイヒヨロロ」は、トビの鳴き聲であり、これを三度くりかへして、韻文の全體に統一
 感を與へてゐる。

備考

ヨミカタ「イケニフネ」の發展として取扱に考慮する。

四十一 シタキリスズメ

教材の趣旨

新しい童話「トビトカメ」の後をうけて、古來傳承する舌切雀の童話を教材とした。ただ童話そのままを掲げないで、最も明朗で興味ある部分を取り、それを四つの場面にあらはして劇的に展開させた。元來舌切雀には残酷な要素も介在し、「かちかち山」の童話とともに、教育的には考慮される部分がある。單にこれをお話として口頭で語るのは、餘

り深刻な感じも與へないからさしつかへないが、教材の文章として、何んもくり返し讀ませる點で考慮すべきものがある。

第一の場面は、オヂイサンが杖をつきながらはるばるスズメの宿を訪ねて行くところ、第二の場面は、スズメたちが大喜びでオヂイサンを迎へるところ、第三の場面は、オヂイサンにスズメたちが踊を踊つて見せるところ、第四の場面は、ツヅラをもらつて歸るオヂイサンを、スズメたちが見送るところである。第一の場面に於ける「シタキリスズメ、オヤドハドコダ」のくり返しは、前課の最後の「ウミノムカフヘフネガイク、ビイヒヨロロ」の韻文の餘韻をうけつつ、韻文とも見られ、散文とも見られる未分化の様式で書かれてゐる。第二の場面は、對話と地の部分より成り、第三の場面は、純粹な叙述の文章、第四の場面は、オヂイサンとスズメたちの對話が主となつてゐる。かうした全體の構成と表現は、やがてあらはるべき劇教材への準備にほかならない。

取扱の要點

舌切雀の話に就いて兒童の記憶を整理し、挿畫(掛圖)を中心として話合をさせ、文章に導入する。
發音を正し、文字語句の指導をなし、段落や地の文、對話の文を意識させて、次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコ六十二頁の「オヂイサンハ、スズメヲカハイガリマシタ」以下「大キナツヅラヲモラツテカヘリマシタ」までを讀ませ、これを手がかりとして、舌切雀の話を要領よく話させる。

コトバノオケイコ六十二頁の

ヨクオイデクダサイマシタ。

サア、ドウゾオアガリクダサイ。

によつて、兒童にこの文の意味を如何に動作にあらはすかを考へさせ、適當に指導して、ことばをいひながら動作をさせる。

コトバノオケイコ六十三頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、書取をさせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「オアガリ」の「ガ」、「ニギヤカ」の「ギ」、「オミヤゲ」の「ゲ」、「アゲマシタ」の「ゲ」、「ゴキゲンヨウ」の「ゲ」は鼻濁音であり、「ゴチソウ」「ゴキゲンヨウ」の「ゴ」は濁音である。

「シタキリ」の「シタ」を「ヒタ」「ヘタ」「スタ」等と訛る地方がある。「スズメ」には方言が非常に多い。「オヂイサン」も「オズーサン」「オジジ」「オジャン」「オジンちゃん」「オンちゃん」等の方言が多く、「オザシキ」を「オダシキ」と訛り、又「ゴチソウ」を「ゴツツオー」と訛る地方がある。その他「タイソウ」「サヤウナラ」には地方的な言ひ方が多いから、矯正につとめる。

語句語法 「オイデクダサイマシタ」「オアガリクダサイ」「オイデクダサイ」等の敬語に注意して適切な指導をなす。

「オヂイサンハ、タイソウヨロコビマシタ」——物語の敘述であるから、敬語が用ひてないことに注意すべきである。

備考

エノホン「カハイイトリ」と連絡して取扱に考慮する。